

- 二〇一八 「琴と静歌(2)―仁徳天皇と石之日売の伝承―」 『弘前学院大学・文学部紀要』54号
- 二〇二〇 「万葉の紫と榛の発想―恋衣の系譜―」 アーツアンドクラフツ
- 三谷栄一
- 一九六九 「記紀から万葉集へ―万葉集巻二の冒頭をめぐる―」 『國學院雑誌』751号
- 一九七三 「磐姫皇后と雄略天皇」 『萬葉集講座五巻 作家と作品1』 有斐閣
- 一九八四 「万葉集巻一・巻二の巻頭歌の位相―磐姫皇后と雄略天皇―」 『記紀万葉集の世界』 有精堂
- 壬生幸子
- 二〇一九 「磐姫皇后歌の表現と趣向―八五番歌を中心に―」 『記紀万葉集の表現と解釈』 おうふう
- 守屋俊彦
- 一九八〇 「軽太子と軽大郎女」 『古事記研究―古代伝承と歌謡―』 三弥井書店
- 山崎正之
- 一九七六 「軽太子関連歌」 『記紀歌謡』 早稲田大学出版部
- 山田孝雄
- 一九三二 『万葉集講義 巻1』 宝文館
- 横倉長恒
- 一九七九 「磐姫皇后の歌」 『初期万葉』 早稲田大学出版部
- 吉永 登
- 一九八六 「軽郎女から磐姫皇后へ―「君が行きけ長くなりぬ」の歌について―」 『萬葉―その異伝発生をめぐる―』 和泉書院

### 【要旨】

古代には、恋する男女が色美しい「恋衣」を着て夜に相逢うという恋愛習俗があった。そしてこの恋愛習俗を踏まえて、例えば恋人を賛美する「紫の丹穂へる妹」(万21)や「さ野榛の衣に付く如す目に付く我が背」(万19)などが生まれている。そしてさらにこの恋人賛美の恋詞が精選され、この恋衣を通すほどに恋のオーラを放って恋慕する「衣通姫」という悲恋の姫が生み出され、この姫を主役にする歌物語が形成された。

その衣通姫には、(1)忍耐型の衣通姫(上位の女君たちに遠慮して恋人の天皇との数少ない相会に耐え忍びながら激しく恋慕する姫)と(2)奔放の衣通姫(直情的に恋人の天皇・太子を激しく恋慕する姫)の二類があり、「流」(系譜)を形成していた。その前者の伝承として允恭紀の弟姫の歌物語と古今集の小野の小町の歌群があり、後者の伝承として允恭記の軽の大郎女の歌物語と万葉巻二相聞の磐姫の歌群がある。

この悲恋の衣通姫伝承は、古代天皇制の祭政一致を基盤とした色好みⅡ一夫多妻制のもたらした産物である。

## テキスト・引用文献・参考文献

相磯貞三 一九七六 『記紀歌謡全註解』 有精堂

青木和夫・石母田正・小林芳規・佐伯有清 一九八二 『古事記』 岩波書店

青木生子・井手至・伊藤博・清水克彦・橋本四郎 『萬葉集一』 新潮社

秋山 虔 一九六七 『小野小町のなるもの』 『王朝女流文学の形成』 塙書房

伊藤 博 一九七四 「卷二 磐姫皇后歌の場合」 『万葉集の構造と成立 上』 塙書房

稲岡耕二 一九七七 『磐姫皇后の歌』 『万葉集を学ぶ（第二集）』 有斐閣

萩原浅男・鴻巣隼雄 一九七九 『古事記・上代歌謡』 小学館

奥村恒哉 一九九六 『古今和歌集』 新潮社

小沢正夫 一九七六 「歌学の源流」 『上代の文学（日本文学史1）』 有斐閣

片桐洋一 一九九〇 『後撰和歌集』 岩波書店

一九九一 『在原業平・小野小町』 新典社

一九九三 『小野小町追跡―「小町集」による小町説話の研究―』 笠間書院

木下正俊・稲岡耕二 一九七六 『上代の文学（日本文学史1）』 有斐閣

窪田空穂 一九六六 『窪田空穂全集第十三巻 萬葉集評釋1』 角川書店

小島憲之・木下正俊・東野治之 一九四四 『萬葉集①』 小学館

佐伯梅友 一九五八 『古今和歌集』 岩波書店

坂本太郎・家永三郎・井上光貞・大野晋 一九六八 『日本書紀上』 岩波書店

佐藤卓司 一九九二 『小野小町再考』 『北海学園大学・学園論集』 74号

塚本澄子 一九九六 『小野小町説話の基層』 『作新国文』 8号

土橋 寛 一九七六 『古代歌謡全注釈―日本書紀編―』 角川書店

一九八九 『古代歌謡全注釈―古事記編―』 角川書店

土橋 寛・小西甚一 『古代歌謡集』 岩波書店

角田文衛 一九七〇 『王朝の映像』 東京堂

直木孝次郎 一九七二 「磐之媛皇后と光明皇后」 『赤松俊秀教授退官記念国史論集』

西宮一民 一九八五 『古事記』 新潮社

畠山 篤 二〇一七 「琴と静歌(1)―荒れるものの静め―」 『弘学大語文』 43号

はなからうか。

こうしてみると、衣通姫の伝承は、祭政一致体制を基盤にした天皇制のもつ色好み生活（神女との政略結婚）・一夫多妻制のもたらした産物だ、といえるだろう。

**秀歌をうたえる賢し女** そして、彼女たちが「衣通姫」としてなかなか表面化しえなかったのは、彼女たちの恋歌が弟姫・軽の大郎女・磐の姫として小町などの秀歌の域にまで達していなかったからだろう。すなわち、「衣通姫」になるには、神女であり、そして天皇などの貴紳の愛妃としてその稀な訪れを待つ女の極北を生きる「麗し女」であり、その立場から生じる想いを優れた歌にできて貴紳の気を引ける「賢し女」であることも、必須条件としていた、と考えられる。

すなわち、恋の実体験を歌にした中古の小町を除く上代の「衣通姫」の恋歌の実体は、その歌物語・歌劇の編纂者たちによる類歌の編纂、改作、創作の結果であろうけれども、少なくともその編纂者たちは「衣通姫」のモデルとしては、その基礎要件として神に仕える神女であり、同時に麗し女であることのみならず、秀歌をうたえる賢し女であることを、想定していたであろう。してみるとこれだけの条件を完備している悲恋の姫君は、稀にしかないのではなからうか。

**「衣通彦」がいない背景** とすると、「衣通彦」＝愛の極北を生きる悲恋の貴紳が造形されるにあたっても、ひたすら一人の姫君を追い求めつつも叶えきれずに苦しい恋に悩み、それを優れた恋歌にできる歌才をもつ貴紳の愛情生活が必要であろう。

しかしこの点、色好みを行使する天皇あるいはそれと同じ立場にある貴紳側には、満足すべき愛情生活が比較的容易に手にできたらう。そうであれば、この貴紳側から愛の極北を生きる「衣通彦」はまず生まれがたいだろう。

**軽の太子の場合** ただし允恭記によると、軽の太子は同母妹の軽の大郎女＝衣通の王だけを熱愛しており、また允恭紀二十三年三月の条によると、「太子、恆に大娘の皇女と合せむと念す。罪有らむことを畏りて黙あり。然るに感でたまふ情、既に盛にして、殆に死するに至りまさむとす。爰に以為さく、徒に空しく死なむよりは、刑有りと雖も、何ぞ忍ぶること得むとおもほす」とあり、何首も切ない恋歌をうたっているのです。太子は「衣通彦」になりえそである。

しかしその太子にしても別伝である安康前紀の允恭天皇四十二年十月の条によると、軽の大郎女との大恋愛から十八年後に、父帝の葬礼直後に女人に「淫」けて暴走し、内乱を誘発して皇位を失っている。これではこの軽の太子にしても、とても恋慕に一途に思い悩む「衣通彦」になりえる資格はないだろう。こうしてみれば、愛の極北を生き、かつそれを秀歌にできる「衣通彦」の高みに立ちえる貴紳は、およそ皆無だったろう。

したがって恋する男を示す定型句は、恋衣から発想された類句の「垣津幡丹付らふ君」あたりが精一杯の限界だったのかもしれない。

## 七 結び

## 1 二つの「衣通姫の流」

二つの「衣通姫の流」 以上、衣通姫（衣通の王・衣通の郎女など）の伝承は、恋のオーラが色美しい恋衣を通すほどに恋慕する悲恋の姫たちの歌物語で、そこには次のように(1)忍耐型と(2)奔放型の二系列があり、それぞれに「流」（系譜）を形成している。

(1) 忍耐型（皇后や上位の女性たちに遠慮せざるをえないために天皇との恋に耐え忍んだ結果、恋のオーラが恋衣を通して輝いた悲恋の姫）

弟姫おとひめ＝衣通いづつめの郎女いらつめ・允恭いんきょう天皇との恋・允恭紀七年・十一年の条・紀版の衣通姫

← 小野をのの小町こまち＝衣通姫いづつめの流りゅう・仁明天皇にんみんとの恋・『古今集』・古今版の衣通姫

(2) 奔放型（天皇・太子と長らく逢えないために天皇・太子への恋情が直情的に高揚した結果、恋のオーラが恋衣を通して輝いた悲恋の姫）

← 軽かるの大郎女おほいらつめ＝衣通いづつめの王みこ・軽ひつぎの太子みことの恋・允恭記・記版の衣通姫

← 磐いはの姫皇后ひめ＝（）・仁徳天皇との恋・『万葉集』卷二相聞・万葉版の衣通姫

謡い物・歌劇 また、以上の衣通姫たちの歌物語における恋歌は、「管弦」（笛や琴）の伴奏を伴った謡い物で、それは悲恋の物語を展開させた歌劇の様相を呈し、平安初期まで継承されていた、と考えられる。

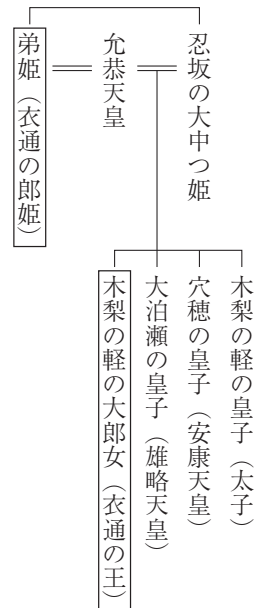
新嘗祭の饗宴での演目 それも前述してきたように新嘗祭の饗宴で演じるのが恒例で、その例が允恭紀の弟姫の歌物語、允恭記の軽の大郎女の歌物語、万葉卷二の磐の姫の歌群だった。したがって、これらと同じ衣通姫の流である小町の歌群も、新嘗祭の饗宴で演じられていたろう。

## 2 「衣通姫」がいて「衣通彦」がない背景

一夫多妻の色好み生活 しかしそれにしても、「衣通姫」だけがいて、「衣通彦」がないのは、なぜだろうか。それは、次のような支配階層の天皇中心の愛情生活によるであろう。朝廷の最高位にある天皇（太子＝次期天皇の予定者）は、一夫多妻の色好みを制度として行使する（すべき）立場にある。それに対して天皇の愛を受ける女性たちの多くは、その特定の一人の貴紳の愛を受ける複数の女人にょにんの一人にすぎない。そのような状況下で愛を全うして幸福感に包まれる女性は、きわめて稀であつたろう。

例えば恋に夢中になって紫染めの恋衣を着て「紫の丹穂にほへる妹いも」・「垣津幡丹付かきつはたにらふ妹いも」になるレベルをはるかに超越して、天皇（太子）との恋に苦慮して恋のオーラが恋衣を通すような悲恋をして「衣通姫」になるべき姫たちは、表面化しないだけで、後宮では星の数ほどいたので

## 《允恭天皇の系図》



**同じ強訴の場の使い回し** この三谷説を論者(畠山)なりに補強すると、允恭紀の弟姫Ⅱ衣通姫の条と仁徳記の石之日売皇后の条に、同じ趣向の強訴が語られていることを指摘したい。

「三 忍耐型の弟姫」で前述したように、允恭紀で弟姫Ⅱ衣通姫を宮廷に連れ出すために、天皇に命じられた舍人の烏賊津の使主が姫の居を構える家の庭先で仰々しく強訴していた。

そして「六 奔放型の磐の姫」では触れなかったけれども、仁徳記の石之日売皇后の条でも、石之日売皇后を宮廷に連れ戻すために、天皇に命じられた舍人の口子の臣が皇后の居を構える筒木の宮の庭先で仰々しく強訴している。

このように登場人物を変えながらも、衣通姫である(と思われる)「弟姫」と「石之日売皇后」を中心にして、同じ趣向の強訴の場が使い回されている。するとこのことは、少なくともこの允恭紀ならびに万葉卷二磐の姫皇后歌群につながる仁徳記には、共通した「原衣通姫物語」の存在したことを予測させそうである。

**二つの衣通姫物語の弁別** しかし、允恭紀の軽の太郎女と万葉卷二相聞の磐の姫は直情的な奔放型の悲恋の姫・ヒロインであり、これに対して允恭紀の弟姫は嫉妬する姉の皇后に遠慮して陰の愛妃にならざるをえない忍耐型の悲恋の姫・ヒロインであった。

となると、三谷説の想定した三つの伝承の原形だとされた原衣通姫物語の衣通姫像には、軽の太郎女と磐の姫のもっている奔放な恋をする女性像、ならびに弟姫のもっている耐え忍ぶ恋をする女性像が、混交していることになる。

とするとこういう正反対の性格を兼ね備えた恋をする女性は、性格が破綻しているというべきではなからうか。はたしてこのような性格の分裂した複雑な女性が、悲恋のヒロインとして人びとから共感を得られるだろうか。

してみるとここでは、衣通姫にははじめから正反対の二系列(忍耐型の弟姫の伝承ならびに奔放型の軽の太郎女の伝承と磐の姫の伝承)があり、当初から二分されていたとみるべきではなからうか。

**磐の姫Ⅱ衣通姫説** たとえ右の拙論にいささかなりとも説得力があるとしても、万葉卷二の磐の姫皇后が衣通姫の一人であると認めている点だけは、三谷説のいうとおりであろう。

万葉版の衣通姫 以上が、万葉版の衣通姫としての磐の姫の悲恋の歌群である。

謡い物でない仁徳紀の磐之媛嫉妬物語 なお、仁徳紀にも仁徳記と同様の磐之媛嫉妬物語があり、また両伝承にほぼ同様の歌謡として天皇を賛美・

恋慕する〈斎つ真椿の歌〉(記57)・〈八十葉の木之歌〉(紀53)、天皇が皇后に復縁を申し出る〈大根根白の歌〉(記61)・〈大根根白の歌〉(紀58)、ならびに〈大根さわさわにの歌〉(記63)・〈大根さわさわにの歌〉(紀57)もある。

しかし、この仁徳紀の伝承には歌曲名の記述がないので、謡い物・歌劇としての性格がないと認め、この仁徳紀の伝承を「衣通姫の流」の考察から除外した(なお、仁徳記の伝承を考察の対象に入れたとしてもほぼ同一の歌謡をうたっているので、結論は同じになる)。

## 7 二つの「衣通姫」の混交

原衣通姫物語の想定 「万葉集巻一・二の巻頭歌の位相―磐姫皇后と雄略天皇―」「三谷栄一」は、万葉巻二の磐の姫の巻頭歌、允恭記の軽の大郎女Ⅱ衣通の王の物語、允恭紀の弟姫Ⅱ衣通の郎女の物語の三者を対象にし、興味深い論を展開している。

それはまず、允恭記と允恭紀の伝承が混乱していたとして、次のように説く。

木梨之輕太子、輕大郎女とは忍坂大中姫(記では忍坂大中津比売命と書く)と允恭天皇との間に生まれた御子である。弟姫はまた忍坂大中姫の妹であり、允恭天皇の愛妃である。そうした関係から伝承中に混乱があったのか、『古事記』の編者の意図かによって物語が混乱し、「衣通姫」という文字は残しながら、『古事記』の允恭天皇条に、弟姫物語の一部が輕太子物語として記載されたに相違ない。

このように「原衣通姫物語」ともいうべき允恭記の原形を想定し、允恭記の軽の大郎女Ⅱ衣通の王の絶唱〈あひねの浜の蠣貝の歌〉(記86)は、〈山たづの迎への歌〉(記87)とともに、允恭紀十一年の条の弟姫Ⅱ衣通の郎女の絶唱〈海の浜藻の歌〉(紀68)に続いていた、と見ている。

なぜなら、この〈あひねの浜の蠣貝の歌〉(記86)と〈海の浜藻の歌〉(紀68)の二つの歌謡は、海辺に関連しているからだと言く。そして、允恭記の〈あひねの浜の蠣貝の歌〉(記86)の「あひねの浜」は通説では所在不明とされているものの、允恭紀によると允恭天皇が弟姫のいる「河内の茅渟の宮を妻訪い、「此れに因りて屢、日根野に遊獵したまふ」ことをしているの、「あひねの浜」の「あ」は接頭語だろうから、「あひねの浜」はこの「日根野」と隣り合う「日根の浜」だったろうと言く。そして神武紀戊午の年五月の条に、「茅渟の山城の水門」とあるので、茅渟の日根野に水門や浜があった、と補強している。

允恭記・紀の伝承と万葉巻二の歌群の生成 そしてこの原衣通姫物語から、允恭紀の弟姫Ⅱ衣通の郎女物語、允恭記の軽の大郎女Ⅱ衣通の王物語、万葉巻二の磐の姫物語へと成長した、と説いている。

この説は原衣通姫物語に発した允恭紀・允恭記・万葉巻二の三つの伝承の生成過程を緻密に系統立てて説いてはいないけれども、これらの伝承を衣通姫伝承として一括し、その系統を整理しようとしていて、実に興味深いものである。



同時に、「二人めの衣通姫」<sup>そとほしひめ</sup> 輕の大郎女像から「二つめの衣通姫の流」<sup>りゅう</sup> 磐の姫皇后への継承・展開でもあることを示している。

允恭記の輕の大郎女も、仁徳記の石之日売も、基本的には強力な力をもつ上位の女君から圧迫され続けて耐え忍ぶだけの愛の形しか選べない姫ではなかった。したがって、万葉卷二の磐の姫歌群を上位の姫君に遠慮してただ天皇の来訪・妻訪いをひたすら待つだけの悲劇のヒロインとみるのは誤読で、題詞の「磐の姫皇后、(仁徳) 天皇を思ひて作らす」ということには、仁徳記における奔放な走る女の磐の姫皇后像をも継承していることを考慮すべきである。

切り取って拡大した筒木の宮での一夜 こうしてみると、万葉卷二の磐の姫歌群の磐の姫は、奔放な直情的な「走る女」として山代の国の筒木の宮まで至り、河内の国の難波にいる天皇の来訪・迎えを待ち続けた末に、その恋情が最も募った一夜の姿を切り取って拡大しながら写し取った、とみるべきだろう。

実のところ、磐の姫皇后のうたった「君が行き日長くなりぬ。山尋ね迎へか行かむ。待ちにか待たむ。」(万85) は、天皇側からみれば「姫が行き日長くなりぬ。山尋ね迎へか行かむ。待ちにか待たむ。」ということになる。しかし、万葉卷二の磐の姫歌群を構想した実作者は磐の姫の立場にだけ視点を当て、この姫の「行き」<sup>き</sup> 山代への出奔・旅を「君の行き」<sup>きみ</sup> 天皇の旅へと発想を逆転させて、長い旅に出た天皇が自分の許に來訪する<sup>き</sup> 妻訪うことをひたすら待つ場面を想定し、恋人をひたすら待ち続ける白鳳時代の近代的な恋する女人像の象徴にした、と考えられる。

この点、前述した「磐姫皇后歌の表現と趣向―八五番歌を中心に―」<sup>壬生幸子</sup> は、「伝承上の皇后像の、嫉妬深さや意志の強さを切り捨てて、夫に焦がれて迷う女を描き出した点に、八五のさらなる趣向があった」と述べている。この壬生論は拙論が説く「衣通姫」の視点を欠くものの、輕の大郎女を祖型にしながら、それを記紀に伝える奔放な磐の姫皇后像にも改変を加えて、新たな待つ女像を作り出した、と述べていて心強いものがある。

## 6 万葉版の衣通姫の謡い物・歌劇

管弦を伴った謡い物 以上、万葉卷二の磐の姫歌群四首の基盤・下地に、允恭記の輕の大郎女と仁徳記の石之日売がいるとすると、これらの伝承の恋歌が各種の歌曲(允恭記は「志良宜歌」<sup>しりあ</sup> 尻上げ歌<sup>ひなふり</sup>・「夷振の上歌」<sup>あけうた</sup>・「宮人振」<sup>みやひとふり</sup>・「天田振」<sup>あまたふり</sup>・「夷振の片下」<sup>ひなふり</sup>・「読歌」<sup>よみうた</sup>、仁徳記は「志都歌」<sup>しつうた</sup> 靜歌<sup>うた</sup>) でうたわれているので、万葉卷二の磐の姫歌群四首も琴や笛を伴った謡い物で、歌劇としても演じられていた、と想定できよう。

してみると、『孫姫式』に「衣通比咩乃歌被管弦<sup>二</sup>而猶存<sup>一</sup>」とあるので、この万葉卷二磐の姫歌群四首も歌劇仕立て・謡い物になって、平安初期までその伝統を継承していた、と推測される。

新嘗祭の饗宴での演目 では、この演目はいつ演じられたろうか。それを示す顕著な場面は、仁徳記で石之日売が「豊の明かり」(新嘗祭の饗宴) に用いる御綱柏<sup>みづなかし</sup>を採りに紀伊の国に行くという歌物語の発端にあり、かつ安康天皇が新嘗祭で即位するに至った允恭記の輕の大郎女<sup>二</sup>衣通の王の歌物語にもあったろう。すなわち、万葉集の磐の姫皇后歌群の下地になっている伝承が新嘗祭にかかわっているもので、後世に催された新嘗祭の饗宴<sup>いしえ</sup>の場が、古の愛の権化(衣通姫)である磐の姫皇后が偉大なる仁徳天皇を恋慕する新作の歌劇を演じるに相応しい、と考えられたろう。

打ち渡す 八桑枝如す  
来入り参来れ。

立派な桑が一面に 繁茂しているように  
わたしはしきりに仰々しく妻訪いしているのだ。

(記63)

## 二つの歌謡の元歌

右の二つの歌謡の元歌は、筒木の宮の所在する山代の国の民間に流布していた恋の民謡であった。その民間のレベルにおける男女の関係はきわめて牧歌的なもので、山代の国の特産である見事な大根と桑（養蚕に必要な作物）の生産叙事を応用・転用して恋歌仕立てにしている。すなわち、白い腕という見事な肉体美と巧みな愛の話を誇る「大根女」（くはしめ）がかつてなした積極的な愛の所作や直情的な愛の言葉を梃子にして、立派な出で立ちの「桑男」が見事な出来の「打ち渡す八桑枝如す」連夜仰々しく、大根女を妻訪うために「来入り参来れ」とうたう。こうして男は女の自分に対する愛情を見越した上で、ずけずけと復縁を迫っている。

**恋の民謡の転用** そして仁徳記は、この民謡を仁徳天皇のうたった歌として巧みに転用している。すなわち元歌に述べられているところの、桑男に気のある麗し女・賢し女の大根女を石之日売皇后に見立て、その大根女に求愛する桑男を仁徳天皇に見立てて、二人の愛を回復する恋歌にしている。

**韓人の奴理能美** なお、仁徳記によると皇后が居を構えた山代の国の筒木の宮は、「韓人」（百済からの渡来人）の奴理能美の家で、彼は当時最先端の業を誇る朝鮮半島渡来の養蚕を生業にする有力な豪族であった。とすると、見事な桑を立派な大根の若葉とともにうたう〈大根さわさわにの歌〉（記63）は素より、立派な根白の大根をうたう〈大根根白の歌〉（記61）も、その元歌はこの一族が管掌する山代の国の筒木地方の民謡であったので、この一族がこれらを転用して仁徳天皇と皇后の歌物語に仕立て上げることにより一役買い、かつその歌物語を自家の古さと栄華を誇る歌語りとして大切に伝承していたろう、と想定できよう。

**「志都歌（静歌）」Ⅱ愛の乱調の鎮静化** こうして天皇を恋慕しながら待ち続けた石之日売の苦悩がここに静まり、天皇と皇后の動乱も沈静化してめでたく復縁している。

そのことは、仁徳記のこの条の最後が夫婦の交わした愛の六首の歌を「志都歌」（静歌）でうたったということを示されている。すなわち、この二人の乱調気味の愛の経緯が結局沈静化したことが、「静かな」琴の伴奏を伴った「静かな」歌唱法によって示されている。静かな音楽が心の鎮静化をもたらし、激しい調子の音楽が心の激動・動乱を招くのは、音楽の常識であろう。このように仁徳記の天皇と磐の姫皇后は結局は再び結ばれて、事態は沈静化している。（琴と静歌(1)「荒れるものの静め」、琴と静歌(2)「仁徳天皇と石之日売の伝承」「畠山」参照）。

**走る女から待つ女へ** しかし、もし万葉巻二巻の姫歌群四首が仁徳天皇が来訪する以前の筒木の宮での一夜だとすると、恋慕する天皇がいつ訪れてくれるかと一夜まんじりもしないで万葉歌四首をうたって天皇を恋慕する姿は、仁徳記で石之日売がうたう〈斎つ真椿の歌〉（記57）で天皇を見事な真椿の花と葉でその雄姿・美質を賛美して恋慕する姿と重ね写真になる。このように天皇を賛美しながら筒木の宮で天皇の来訪を待ち続ける方方は、恋のために走ってはみたものの、先を見通せないまままんじりともできない待つ女の悲劇的な一夜の姿だった。

すなわち、仁徳記を踏まえた万葉巻二の磐の姫歌群の磐の姫は、古代的な走る女から近代的な待つ女に大きく傾斜していることになる。これは



よく示されていた。

弟姫の発言と同質の天皇恋慕 またこの〈斎つ真椿の歌〉の「葉広<sup>はひろ</sup>斎<sup>まづき</sup>つ真椿<sup>まづき</sup>。其<sup>し</sup>が花<sup>はな</sup>の照<sup>て</sup>り坐<sup>いま</sup>し、其<sup>し</sup>が葉<sup>は</sup>の広<sup>ひろ</sup>り坐<sup>いま</sup>すは、大君<sup>おほきみ</sup>ろかも」は、「三忍耐型の弟姫」で前述した允恭紀八年二月の条で弟姫Ⅱ「衣通<sup>そとほし</sup>の郎姫<sup>いらつめ</sup>」が恠<sup>おこ</sup>い慕<sup>も</sup>う允恭天皇に告白した「妾<sup>やつこ</sup>、常<sup>つね</sup>に王宮<sup>おほみや</sup>に近<sup>ちか</sup>つて、昼夜<sup>ひるよる</sup>相<sup>あひ</sup>続<sup>つ</sup>ぎて、陛下<sup>きみみさひ</sup>の威儀<sup>みぎ</sup>を視<sup>み</sup>むと欲<sup>おも</sup>ふ」ということばにも匹敵するもので、石之日売のうたう〈斎つ真椿の歌〉も弟姫の告白も、天皇賛美と天皇恋慕の心情に溢れている。

天皇の来訪・妻訪い 右のような石之日売の真情を確実に踏まえた仁徳天皇は、奔放な「走る女」の日売が自分を迎えるために筒木の宮に天皇が来訪することを一途に待ち続けていることを重々承知した上で、筒木の宮にいる皇后を妻訪うている。

そして天皇は〈大根根白の歌〉(記61)と〈大根さわさわにの歌〉(記63)をうたいながら、かつて皇后が麗<sup>くは</sup>し女<sup>め</sup>のもつ見事な大根の根のような白い腕で積極的に天皇を抱き締めて共寝する愛の態度を取り、また皇后が大根の若葉の生育する葉摺れのように「さわさわに」、すなわち前述の〈斎つ真椿の歌〉(記57)で斎<sup>ゆ</sup>つ真椿<sup>まづき</sup>を用いて天皇を賛美しながら恋慕するという色よい愛の真情をはつきりことばにしていたので、こうして「八桑枝如<sup>やがはな</sup>す来入<sup>きい</sup>り参来<sup>まゐ</sup>れ」Ⅱたくさんの立派な桑が繁茂しているようにしきりに仰々しく妻訪いしているのだ、と述べた。こうして、天皇は皇后と改めて愛を確認し、復縁している。

〈大根根白の歌〉の本文 その〈大根根白の歌〉(記61)の本文は、次のとおりである。

つぎねふ 山代女<sup>やましうめ</sup>の  
木<sup>こ</sup>鋤<sup>くはも</sup>持ち 打<sup>う</sup>ちし大根<sup>おほね</sup>。  
根<sup>ね</sup>白<sup>しろ</sup>の 白<sup>しろ</sup>腕<sup>たむき</sup>  
纏<sup>まと</sup>かずけばこそ、  
知らずとも言はめ。

(つぎねふ) 山代女<sup>やましうめ</sup>が  
木の鋤<sup>くはも</sup>を持って 畑<sup>はたけ</sup>を耕<sup>はたら</sup>いて作<sup>つく</sup>った大根。  
その根<sup>ね</sup>が白<sup>しろ</sup>いように 白<sup>しろ</sup>い腕<sup>たむき</sup>で  
私<sup>わたし</sup>を抱<sup>かか</sup>りなかつたのなら、  
知らないといつてもいい(しかしそのように私を抱き締めておいて、私を知らないとは言わせ  
ないよ)。(記61)

〈大根さわさわにの歌〉の本文 その〈大根さわさわにの歌〉の本文は、次のとおりである。

つぎねふ 山代女<sup>やましうめ</sup>の  
木<sup>こ</sup>鋤<sup>くはも</sup>持ち 打<sup>う</sup>ちし大根<sup>おほね</sup>  
さわさわに 汝<sup>な</sup>が言<sup>い</sup>へせこそ、

(つぎねふ) 山代女<sup>やましうめ</sup>が  
木の鋤<sup>くはも</sup>を持って 畑<sup>はたけ</sup>を耕<sup>はたら</sup>いて作<sup>つく</sup>った大根。  
すると大根がみごとに成長して自ら賑やかな若葉の擦れる音—さわさわ—を発する。そのよう  
に色よい愛に溢れたことばをお前が言うものだから、

に継承された経緯を、さらにもう一度（三度目）検証してみたい。

仁徳記の石之日売皇后は、自分の仁徳天皇への愛情を嫉妬という形で最大限に表現した女性で、その天皇が他の女性との評判を立てると、姫は「足も足搔かに」（足摺りをして）嫉妬するという、行為に直結する古代の「走る女」であった。

石之日売が「豊の明かり」（新嘗祭の饗宴）に用いる御綱柏を採りに紀伊の国に行っている途中で、天皇が八田の若郎女と通じたと聞いた時も直ちに反応して、出自家のある大和の国の葛城に帰ろうとして難波の津から山代河を遡上するものの、途中で考え直して、天皇の都を置く河内の国（難波）と出自家のある大和の国の中間にある山代の国の筒木の宮に居を構えている。この間、石之日売は他の女を愛した天皇を批判しつつも、〈斎つ真椿の歌〉（記57）において山代河を遡上する時にその川辺に生えている烏草樹の木の下に「生ひ立てる」見事な「葉広斎つ真椿」を見、「其が花の照り坐し、其が葉の広り坐すは、大君ろかも」と仁徳天皇の雄姿・美質を賛美し、恋慕している。

復縁と離縁の境界線に立つ待つ女 このように石之日売は、地理的にも心理的にも、愛する天皇の許に戻って復縁するか、実家に戻って離縁するか、という境界線に立っている。したがって、奔放に行動しようとする「走る女」の石之日売は、天皇の態度・選択次第でどちらに落着するかをひたすら「待つ」ことになる。

〈斎つ真椿の歌〉の本文 その〈斎つ真椿の歌〉（記57）の本文は、次のとおりである。

つぎねふや 山代河を  
 河上り 我が上れば、  
 川の辺に 生ひ立てる  
 烏草樹を 烏草樹の木。  
 其が下に 生ひ立てる  
 葉広 斎つ真椿。  
 其が花の 照り坐し、  
 其が葉の 広り坐すは、  
 大君ろかも。

（つぎねふや） 山代川を、  
 川上りして 遡って行くと、  
 川の辺に 生えている  
 烏草樹の木よ 烏草樹の木。  
 その木の下に 生えている  
 葉広の 生き生きとした椿。  
 その花が 照り輝くように、 血色がよくお顔が輝いておいでになり、  
 その葉が 広がっているように、 ゆったりとお座りになっているのは、  
 大君でございます。

（記57）

天皇賛美Ⅱ恋人恋慕 右の〈斎つ真椿の歌〉の「葉広斎つ真椿」其が花の照り坐し、其が葉の広り坐すは、大君ろかも」の元歌は、『古代歌謡全

註釈―古事記編―』「土橋寛」によると新嘗祭を執行する天皇の雄姿を賛美する宮廷儀礼歌である。この天皇賛美の詞章が恋人賛美にもなりえ、相互に転用・転換できることは、「二 恋衣を着る女人から衣通姫へ」で前述したように〈綜麻条の榛の歌〉（万19）の元歌の主題が恋人を賛美することによって恋慕することにあっただけども、これを近江遷都の儀礼歌として天智天皇の雄姿を賛美することに転用・転換していたことにも、

場合」[伊藤博]が次のように白鳳時代の宮女であると説いて、ほぼ通説化している(素より「磐之媛皇后と光明皇后」[直木孝次郎]が説くように、異説もあり、磐の姫を天平時代の光明皇后とダブらせる説もある)。その引用は少々長くなるものの、正確を期して記すことにする。

卷二相聞のばあい立脚して多少の説明を加えておくと、古事記において、神代の八千矛神と須勢理毘売の関係は例外とするならば、男女対等の愛情関係が始まるのは仁徳朝、すなわち磐姫皇后嫉妬の物語からであるという点が重要である。仁徳記以前にあつては、女が男に對等にかかわる話、女の意志や立場が人間的に尊重される話は、ほとんど見当らない。それが、下巻に入るや、磐姫皇后の嫉妬となって現われ、やがて軽太子と軽郎女の心中物語に継がれている。磐姫皇后は、嫉妬も策略も闘争も遊宴も急激に増加する「人の世」(記下巻)の歴史の最初に、人間のあるいは女や恋の「代表者」ともいうべき姿勢をもって、きわめてはなばなしく登場するのである。そしてさらに注意すべきことは、古事記において、仁徳天皇は神代の八千矛神の再来者として描かれているといつてよいが、その両者の妻がまた古事記において嫉妬の代表者としてとらえられている点である。磐姫皇后はあきらかに須勢理毘売の再現と見られるのであつて、二つの物語には濃密な関連が認められる。これは、旧辞伝承者層または古事記編者層の意識した構成とみられ、その点、磐姫皇后が、白鳳現代人における「近つ世」(前代Ⅱ古代)の恋の代表者として普遍的認識を獲得していたということはますます明白であらう。

**須勢理毘売の再現** 実に明解な説なので納得できるものの、ただ一点、磐の姫皇后は須勢理毘売ともども嫉妬深いので、確かに磐の姫は「須勢理毘売の再現」とも考えられる。

**衣通の王の再現** しかし、卷二の相聞歌四首には嫉妬する皇后像はどこにもみられず、それどころか允恭記において一途に君(軽の太子)を恋慕する「軽の女郎女」Ⅱ「衣通の王」と重ね写真の関係になっている。とすると、この万葉卷二における磐の姫は、日頃抑えていた恋情が堰を切ったように迸り出、恋のオーラが恋衣を通して放射して直情的に絶唱をうたった「軽の女郎女Ⅱ衣通の王の再現・再来(流)」といわなければならぬだろう。してみると伊藤などが唱える通説は、男女対等の関係を主張して嫉妬する女性像を重視しすぎ、肝腎の恋のオーラを発する祖像Ⅱ衣通の王としての悲恋の女性像を見落している、というべきだろう。

**主役の差し替え** とすると、万葉卷二の巻頭歌の作者として磐の姫皇后が仮託されたのは、「人の世」(記下巻)の允恭記で激しく軽の太子を恋慕した軽の女郎女を白鳳現代における「近つ世」の恋する女性のモデル・下地にしつつも、その背後で犯した兄の太子との相姦が忌避され、「人の世」(記下巻)に位置する仁徳記で嫉妬までして激しく仁徳天皇を恋慕した磐の姫が白鳳現代人における「近つ世」の最初の恋の代表者として置き換えられた、と考えるべきかもしれない。

## 5 筒木の宮での磐の姫の一夜

**天皇を賛美し恋慕する走る女** 本節では、万葉卷二相聞の冒頭歌群の作者に仮託された悲恋のヒロインが、軽の女郎女Ⅱ衣通の王から磐の姫皇后

**起承転結の連作** 以上、磐の姫皇后歌群は、「卷二磐姫皇后歌の場合」「伊藤博」が説くように、「四首は、第一首の「迎へか行かむ」を承けて第二首の興奮があり、また第一首の「待ちにか待たむ」に応じ第二首から転じて第三首の反省があり、以上曲折展開した感情を収めて第四首の嘆息があるものと見られ、絶句四句の起承転結の法さながらに、連作の形態顕著というべきである」。

#### 4 衣通の王の再現

**衣通姫としての一夜** そしてこの四首における起承転結は、君（仁徳天皇）の来訪を待つ女（磐の姫皇后）の一夜を時間軸にして配列されている。前述したように夜は恋の時間であり、作者の磐の姫は恋衣を着てその一夜をまんじりともしないで君（仁徳天皇）の妻訪いを待ち、恋歌を口ずさんでいる。

本節では、磐の姫皇后が「衣通の王」の再現・「流」であることを再度述べてみたい。

**恋のオーラを放つ初夜** 磐の姫の恋の夜のはじまりは、君（軽の太子＝次期皇位継承者）を慕う恋のオーラを色美しい恋衣を通して放射しながら「山たづの迎への歌」（記87）を絶唱した「衣通の王」＝軽の大郎女のあり方を、ほぼ踏襲している。したがって、允恭記の軽の大郎女を「衣通の王」と称した由来を記した「その身の光、衣より通し出づればなり」と同じく、磐の姫も恋のオーラを恋衣から放射させながら、直情的に一首目の「山尋ね迎への歌」（万85）を絶唱している、と想定できよう。少なくとも、この四首の歌群を連作として加筆したり創作したりして整えた実の作者は、そのように考えていたろう。

**情死と老残まで想う恋慕** そして夜が更けるに従って、二首目では軽の大郎女のなしたような情死への激しい思いを述べ、また三首目では麗し女ぶりを失った老残の白髪になってまでも待ち続けるといふ濃密な恋慕を述べる。

**恋のオーラが消えない明け方** そして明け方にうたった四首目の「秋の田の朝霧の歌」（万88）では、磐の姫だけが辿り着いた、何としても晴らしきれない嘆息の境地に至っている。普通は明け方になると恋の時間に区切りをつけ、恋衣も脱いで恋情も静まることになっている。しかし磐の姫の場合は彼女の眺めている明け方の「秋の田の穂の上に霧らふ朝霞」と同じで、「いつへの方に（いつになったら・どちらに）吾が恋やまむ」と思うほど恋情は濃密に漂っている。この明け方の磐の姫の強い慕情は、苦しい恋情の激しさにうち震えながら待つ恋の一夜が凝縮された心情であった。

してみると、恋のはじまりの初夜において恋のオーラが恋衣を通して輝く「衣通の王」のあり方は、真夜中は素より明け方にさらに増大していることになろう。

**「衣通の王の流」** 確かに磐の姫皇后歌群には、恋衣の描写はなく、また磐の姫は允恭記の「衣通の王」＝軽の大郎女のように古代的な「走る女」＝行動的な愛の人ではなく、近代的な「待つ人」ではある。しかし、以上のように允恭記の走る女＝「衣通の王」伝承を踏まえた歌群の歌柄から、この巻二の冒頭歌群の作者の磐の姫は「衣通の王（衣通姫）の流」に位置する、とわかるだろう。

**作者が磐の姫皇后に仮託された背景** 万葉巻二相聞の冒頭歌群の作者として磐の姫皇后が仮託された背景・根拠については、「卷二磐姫皇后歌の

山の岩根しまきて死なましものを」(万86)も、長い旅先にある君との愛に殉じた一種の情死といえるであろう。

こうしてみると、初瀬の大峯を墓地として二人の仲を定めたとする「思ひ妻」・「吾が思ふ妻」のいない「家」・「国」に戻りたくないという愛に満ちた允恭記の二首の葬歌(「初瀬の山の歌」・「初瀬の川の歌」と、君を尋ねる旅の途中の高山で死んでしまえばよかったとうたう「高山で死なましものを歌」(万86)との間にも、一種の匂い付けのような本歌取りの関係があるう。すなわち、大峯と高山は女主人公の葬地・死に場所になっており、高山は大峯の言い換えになつていよう。

**深化された待つ女** 三首目と四首目は允恭記離れを進め、次第に独創性を増している。三首目の「ありつつも君を待つ歌」(万87)の左注に引かれた「居明かして君を待つ歌」(万89)は、黒髪に霜が降っても構わずに座り続けて君を待つ、と述べている。これに対して、「ありつつも君を待つ歌」(万87)は、黒髪が白髪になるまでもこのまゝいつまでも君を待つ、と述べている。

この両者のうたう恋情には、著しい濃淡がある。前者の恋情は君を一晚中待ち続けるという類型的なもので、『萬葉集①』『小島憲之ほか』の頭注が説くように民謡の類であろう。これに対して、後者の恋情は濃密で、君を白髪になるまで生涯待ち続けるというもので、ここではそれなりに深化された待つ女が造形されている。

この「ありつつも君を待つ歌」(万87)と「居明かして君を待つ歌」(万89)の関係は、『萬葉集評釋1』『窪田空穂』が説くように、「連作の組織者は、この周知の歌謡(万89・論者の注)を取って組織の中に入れようとしたのであるが、それには一夜ということをあらわしている『居明かして』では適さないところから、長期を意味する『ありつつも』に変え」たと説くとおりであろう。すなわち、類型的な「居明かして君を待つ歌」(万89)からそれなりに独創的な「ありつつも君を待つ歌」(万87)へと改作された、とみている。

**独創的な待つ女の造型** 四首目の「秋の田の朝霞の歌」(万88)は、この三首目をさらに進めて、きわめて独創的な待つ女を造型しているようである。この歌の主題については、『萬葉集講義卷二』『山田孝雄』が説くように「第四首は以上三首の帰結とし、特に遙に第一首の二途その一を擇ばむかといへるに對してその悶悶の情殆ど、處置すべき方途なきを嘆息せられたるなり」というべきだろう。

そしてこの四首の歌群におけるこの歌の独創性については、次に引用する『萬葉集評釋1』『窪田空穂』の見解が最も正鵠を射ているように思われる。

第一首より第三首までは、これを形の上から見ると、口承文学の色彩の濃厚なものである。心は平明で、語は直線的に続いており、含蓄、屈折の趣がなく、耳に聞けばただちに胸に感じ得られる性質のものである。第四首は(中略)記載文学としても典型的なもので、後代の趣の深いものである。感性を主としているものの、耳に聞いて感じ難いというものではなかったと思われるが、ともかく高度の文芸性をもった人によって作られたものであることは明らかである。この歌は、この連作を組織するにあたって作られたもので、その意味で連作組織者の作ではないかと思わせる。



この点、この二人の絶唱の共通性・関連性にこそ、まず注目すべきであったように思われる。

また磐の姫皇后にしろ、軽の太郎女おはらうめ衣通そとほしの王みこにしろ、そこには允恭紀の弟姫や『古今集』の小町のように遠慮すべき高貴な女性（たち）は存在しないので、自由奔放な行動と意志表示ができる立場にある。

この二点の共通性・関連性に注目するならば、磐の姫皇后が軽の太郎女おはらうめ衣通そとほしの王みこの「流りゅう」（系譜）に位置することに気付くはずであった。

〈山たづの迎への歌〉（記87）の本歌取り 允恭記の軽の太郎女おはらうめの絶唱〈山たづの迎への歌〉（記87・万90）が、万葉歌の磐の姫皇后の一首目〈山尋ね迎への歌〉（万85）の下敷きになっていることは、だれにも容易に想定できることである。この両歌はほぼ同一趣向を取っており、その出典の新旧によって磐の姫作の〈山尋ね迎への歌〉（万85）の祖形が軽の太郎女おはらうめの〈山たづの迎への歌〉（記87・万90）である、とわかる。

軽の太郎女は、「君（軽ひつぎのみこの太子）が行き」旅が長くなったので、君を迎えに行く、決して待ち続けたりなどしないと決然と述べて、君の許に「追いたひ到いた」っている。これに対して磐の姫は、「君（仁徳天皇）が行き」旅が長くなったので、山を尋ねて君を迎えに行こうか、それとも待ち続けようか、と迷っている。

このように歌のことは少し変えることによって激しい愛の行為を激しい愛の逡巡に変え、直線的で行動的な骨太の恋をする古代の女性像が、当時における近代的な複線的で悩ましい恋をする女性像に改造されている。このような手法は、かなり見え見えの換骨奪胎・付きすぎた感のある本歌取りである。

以上のように〈山尋ね迎への歌〉（万85）は、允恭記にある古いにしえの恋歌〈山たづの迎への歌〉（記87・万90）を下地にして、当時における近代人としての万葉人の恋歌に仕立て直している。

この拙論と趣旨のことは、既に「磐姫皇后の表現と趣向―八五番歌を中心に―」「壬生幸子・二〇一九」が述べている。すなわち、軽の太郎女おはらうめの〈山たづの迎への歌〉（記87・万90）の「語句を変えつつ磐姫の歌（八五）を仕立て上げた」「一つの趣向」とみている。そして「軽太子の伊予流謫もまたひとつの旅であり、太子が流されて日のたつことを歌う太郎女の二句（君が行き日長くなりぬ」、論者注）を借用した磐姫の歌は、夫が旅中にあるという状況設定も借りることになった」と説く。この説には全面的に賛同したい。

**情死のバリエーション** 磐の姫の二首目の〈高山で死なましものをの歌〉（万86）にしても、允恭記の軽の太郎女おはらうめの情死のバリエーションであろう。

「五 奔放型の軽の太郎女」で述べたように、軽の太子ひつぎのみこは「思おもひ妻つま」・「吾あが思おもふ妻つま」＝軽の太郎女を恋い偲ぶ〈初瀬の山の歌〉（記88）と〈初瀬の川の歌〉（記89）をうたい、その元歌が夫婦の墓地を選定し、伴侶のいない「家」・「国」に戻りたくないという夫婦愛を主題にした葬歌であったことを踏まえて、二人はそのまま愛に殉じて情死している。このように允恭記における軽の太郎女は、恋人のいる旅先の伊予の国で情死している。

これに対して万葉歌における磐の姫は、〈高山で死なましものをの歌〉（万86）で恋人を追いかける旅の途中で「高山たかやま」で死ぬことを想定している。

そして、この両者には一人で死ぬか二人で死ぬかの相違があるけれども、二人で亡くなる太子と太郎女の情死は素より、磐の姫の想定する「高

**書紀の検索** 以上のように、〈山尋ね迎への歌〉(万85)の作者について異同があるので、『万葉集二』[青木・井手・伊藤・清水・橋本]の頭注が説くように、万85～88の作者を磐の姫皇后とする原万葉本文の伝えに不審を抱き、それで以下は正史である『日本書紀』に当たって検証している。すなわち、〈山尋ね迎への歌〉(万85)の作者である磐の姫皇后を主役にする⑩仁徳紀二十二年ならびに三十年の条の嫉妬物語を検索するとともに、⑪同母妹の軽の太娘の皇女と相姦した軽の皇子の醜聞を記した允恭紀二十三年ならびに二十四年の条をも検索している。

その検索の結果は、仁徳紀を引用した左注の⑪の場合、磐の姫皇后歌群の作者である磐の姫皇后の嫉妬物語を紹介・引用したにすぎない。そして仁徳紀の二十二年から三十年の条で磐の姫皇后のうたった歌は、『万葉集』の磐の姫皇后歌群四首(とくに万85)と直截的に関連するところが皆無であった。

允恭紀二十三年・四年の条を引用した左注の⑫の場合、「五 奔放型の軽の大郎女」で前述したように、この伝承は同母兄妹の軽の皇子と軽の太娘の相姦の醜聞で、とても悲恋物語とはいえない代物だった。この允恭紀の条の三つの歌謡(紀69・70・71)の作者は軽の皇子ただ一人であり、その歌のいずれにも万葉歌の磐の姫皇后歌群四首(とくに万85)とは何の関わりも見出せなかった。

**安直な書紀の検索** したがって、左注の⑬⑭⑮の最後に述べる⑯「二代二時にこの歌を見ず」とあるのは、『日本書紀』の⑬と⑭の引用を踏まえ、仁徳朝の磐の姫の皇后の嫉妬物語ならびに允恭朝の同母兄妹の軽の皇子と軽の太娘の相姦の物語には、万葉歌の磐の姫皇后の〈山尋ね迎への歌〉(万85)と同じ歌がない、とまとめている。すなわち⑬仁徳紀と⑭允恭紀のいずれもが、〈山尋ね迎への歌〉(万85)と作者の異同を解決する決め手になっていない、と当初の課題を放棄している。

こうしてみると、書紀の検索が不発に終わっているのも、この左注が〈山尋ね迎への歌〉(万85)と同じ歌あるいは類歌、ならびにその歌の作者の伝承を列挙しただけだったからであろう。とすると、これらの編纂者の記した注のねらいである歌と作者の検索は、きわめて判然としない安易で中途半端な考証であった、といわざるをえない。

**磐の姫作は後世の仮託** してみると、『万葉集二』[青木ほか]の頭注が説くように、この左注は磐の姫の四首の「連作が後世の仮託であることを知らない者の筆である」という見方が正鵠を射ている。

そして、この説を踏まえて磐の姫の四首の「連作が後世の仮託である」ことを前提にすると視野が開け、この四首の作者の磐の姫が「万葉版の衣通姫」であることが見えてくるようである。

### 3 「衣通の王」の視点

「衣通の王」の視点 せっかく⑬允恭記の検索によって、軽の太娘女⑭「衣通の王」が磐の姫皇后作の一首目の〈山尋ね迎への歌〉(万85)の類歌〈山たづの迎への歌〉(記87・万90)をうたっていることを指摘しながらも、この情熱的な允恭記の軽の太娘女⑭衣通の王が奔放な恋の絶唱〈山たづの迎への歌〉(記87・万90)をうたったことと、『万葉集』の磐の姫皇后もほぼ同様の奔放な恋の絶唱〈山尋ね迎への歌〉(万85)をうたっていることとの共通性・関連性に特に注目していないようである。

⑤ また日はく、

「遠つ飛鳥の宮に天の下知らしめす雄朝嬪稚子の宿祢の天皇の二十三年の春の三月甲午の朔の庚子に、木梨の輕の皇子を太子となす。容姿佳麗しく、見る者自づからに感でぬ。同母妹輕の太娘の皇女も亦、艶妙し云々。遂に竊かに通ふ。乃ち悵懷少しく息みぬ。二十四年の夏の六月に御羹の汁凝りて氷となる。天皇異しびてその所由を卜へしめたまふ。卜者の曰さく、『内の乱有り。蓋しくは親親相奸けたるか云々』とまをす。仍りて太娘の皇女を伊予に移す」といふ。

⑥ 今案ふるに、二代二時にこの歌を見ず。

## 2 左注の視点

〈山尋ね迎への歌〉(万85)の左注(1) 左注は、後世の『万葉集』の編纂者が注したものである。

左注の④は、一首目の〈山尋ね迎への歌〉(万85)と同じ歌とその作者(磐の姫皇后)の出典を検索し、ともに『類聚歌林』の記述と一致することを指摘している。「卷二磐姫皇后歌の場合」「伊藤博」によると、「磐姫皇后歌が、四首一体の作である以上、この注は、第一首だけは歌林には皇后作として載せているが、あとの三首は歌林には収録しておらず、万葉と歌林とで伝えが違ふことを意味する」という。この指摘は、正鵠を射ているように思われる。

〈ありつつも君を待つ歌〉(万87)の左注 左注の⑥は、三首目の〈ありつつも君を待つ歌〉(万87)とまったく同じ歌ではないけれども、類歌性の高い異伝歌の〈居明かして君を待つ歌〉(万89)があつて、その作者が未詳であることを、今は現存しない『或本』・『古歌集』を引用して指摘している。

〈山尋ね迎への歌〉(万85)の左注(2) 左注の⑦は、〈山尋ね迎への歌〉(万85)の類歌とその作者をめぐって改めてその出典を検索している。

その⑦は、允恭記に伝える同母兄妹の輕の太子と輕の太郎女の悲恋物語の引用である。この伝承の梗概については、「五 奔放型の輕の太郎女」で詳述している。この左注の⑦は次いで、万葉歌の磐の姫皇后作の〈山尋ね迎への歌〉(万85)が允恭記の輕の太郎女作の〈山たづの迎への歌〉(記87・万90)と類似していることを校異として指摘している。

允恭記の〈山たづの迎への歌〉(記87・万90)は、左注のいうように「古事記」と『類聚歌林』と説ふ所同じくあらず」とあるのは当然のことで、〈山尋ね迎への歌〉(万85)が『類聚歌林』の所収歌と同じであるのに対して、万葉歌の〈山尋ね迎への歌〉(万85)が允恭記の〈山たづの迎への歌〉(記87・万90)と小異があることを意味している。

そして「歌の主もまた異なり」というのも、〈山尋ね迎への歌〉(万85)の作者が磐の姫皇后であるのに対して、允恭記の〈山たづの迎への歌〉(記87・万90)の作者が輕の太郎女であることを示している。

したがって、〈山尋ね迎への歌〉(万85)と〈山たづの迎への歌〉(記87・万90)の本文と作者をめぐって④歌林の情報と⑦允恭記の情報に異同が生じることになり、そのことを指摘している。

迎へか行かむ。待ちにか待たむ。

④ 右の一首は、山上の憶良の臣の類聚歌林に載す。

かくばかり 恋ひつつあらずは、高山の  
岩根しまきて 死なましものを。

ありつつも 君をば待たむ。打ち靡く

吾が黒髪に 霜の置くまでに。

秋の田の 穂の上に霧らふ 朝霞、

いつへの方に 吾が恋やまむ。

⑤ 或本の歌に曰はく

居明かして 君をば待たむ。ぬばたまの

吾が黒髪に 霜は降るとも。

右の一首は、古歌集の中に出づ。

⑥ 古事記に曰はく

輕の太子、輕の太郎女に好く。この故にその太子を伊予の湯に流す。この時、衣通の王、恋ひ慕ひあへずて、追ひ往きましし時に歌ひたまひ

君が行き 日長くなりぬ。

山たづの 迎へを行かむ。

待つには待たじ。

〔此に山たづと云へるは、是れ今の造木なり。〕

右の一首の歌は、古事記と類聚歌林と説ふ所同じくあらず、歌の主もまた異なり。

⑦ よりて日本紀に檢すに、曰く、

「難波の高津の宮に天の下知らしめす大鷦鷯の天皇の二十二年の春の正月に天皇、皇后に語りて、八田の皇女を納れて妃とせむとしたまふ。皇后聴さず。ここに天皇歌よみして皇后に乞ひたまふ云々。

三十年の秋の九月乙卯の朔の乙丑に、皇后紀伊の国に遊行して熊野の岬に到りてその処の御綱葉を取りて還る。ここに天皇、皇后の在さぬを伺ひて八田の皇女を娶して宮に納れたまふ。時に、皇后難波の渚に到りて、天皇の八田の皇女を合しつと聞きて大きに恨みたまふ云々」といふ。

迎えにいかうか。それともひたすら待ち続けようか。

(万 85)

これほどに 恋い焦がれてなんかおらずに、いつそのこと 迎えに出て険しい高山の  
岩を枕にして 死んでしまえばよかった。

(万 86)

やはりこのままで いつまでも君を待とう。長々と靡く  
わたくしの黒髪が 白髪になるまでも。

(万 87)

秋の田の 稲穂の上に立ちこめる 朝霞ではないが、  
いつになったら(どちらに) この霧のような思いは消えさることか。  
この霧のような思いはなかなか晴れそうにない。

(万 88)

ここでじつと夜を明かして 君を待とう。(ぬばたまの)  
このわたくしの黒髪に 霜が降りようとも。

(万 89)

あなたの旅は ずいぶん日も経った。

(山たづの) 迎えにいかう。

こうしてひたすら待ち続けるのは堪えられない。

(万 90)

〔ここに山たづというのは、これは今の造木(接骨木)のことである〕

だけが歌われている。もしかしたら軽の大娘の心情が描かれているかもしれないと思い、それらしい章句を探してみると、(鳩の下泣きに泣く歌)(紀71)の下句「下泣きに泣く」(忍び泣きに泣く)が目につく程度で、ここにはじめて男を知った乙女の姿が描かれているようにも理解できる。しかしもしそうだとすると、男に愛されてしまったこの乙女の初心な気持ちは、太子を激しく恋慕して恋のオーラを恋衣を通して放射しながら、愛の絶唱をうたうにはほど遠いだろう。

ましてや、妹との相姦事件を起こしてから十八年後の安康前紀に至ると、事もあろうに父帝の葬礼直後に大娘ならぬ婦人に暴力的に「淫け」たことが皇位継承をめぐる内乱の発端になっている。このため、この伝承は政治問題だけが主題になり、軽の大娘との悲恋譚の面影すら残っていない。

「艶妙し」の皇女は「衣通の王」に直結しない 悲恋の「衣通の王」を追跡する本論にとって、この二つの紀の伝承には見るべきものがない。

それでもあえていえば、これらの紀の伝承は軽の大娘が允恭紀二十三年の条で「艶妙し」といわれる美女ではあるけれども、兄の太子への愛には絶唱を吐露せざるをえないほどの激しさが無い。したがってこれを言い換えてみると、「艶妙し」の皇女は恋のオーラが恋衣を通すほどの「衣通の王」になっていないので、「艶妙し」といわれる身体的美質の持ち主「絶世の麗し女が直ちに「衣通の王」にはなりえない、という裏返し論証には有効であろう。

歌劇仕立てになっていない また右の允恭紀と安康前紀の条は、歌謡を四首と二首を挙げながらも、允恭記のように歌曲名を記していない。したがってこれは、允恭記にあるような歌劇仕立てを否定、無視しているもののようである。すなわち、この二つの伝承に取り込まれている歌謡には、何らかの主題(悲恋とか)をアピールすべき芸能的な性格が認められないようである。

## 六 奔放型の磐の姫

### 1 もう一つの「衣通姫の流」

もう一つの「衣通姫の流」 古代文学には、前述した「軽の大娘女」||「衣通の王」(衣通姫)の系譜に連なる、いわゆるもう一つの「衣通姫の流」があるようである。その衣通姫の系譜に位置するのは、『万葉集』巻二の相聞の冒頭を飾る「磐の姫皇后、(仁徳)天皇を思ひて作らす歌四首」(万85~88)の作者・磐の姫皇后である。

磐の姫皇后歌群の本文 その磐の姫皇后歌群の本文と左注は、次のとおりである。なお左注に付した①~⑤は、論者(畠山)が説明の便宜上付したものである。

磐の姫皇后、天皇を思ひて作らす歌四首

君が行き 日長くなりぬ。山尋ね

磐の姫皇后が、(仁徳)天皇を思つて作られた歌四首

君の旅は 久しくなった。山を踏みわけて



と歌詞が矛盾する結果になり、したがって紀が記の所伝を改作したものであることを示している。

この点、『日本書紀上』『坂本・家永・井上・大野、四四七頁』の頭注と「軽太子と軽の女郎女」〔守屋俊彦〕は、允恭紀二十三・二十四年の条は軽の太子と軽の大娘が同母兄妹の相姦の罪によって人望を失った話で、この方が悲恋の歌物語の様相を呈する允恭紀よりも本来の原型をとどめると説く。

確かに、允恭紀の伝承は話柄からみると原話に近いかもしれない。しかし以上の歌謡の構成からだけみると、悲恋の歌物語を呈する允恭紀の方が史実を政治的に述べる允恭紀よりも古型を残している、とみるべきかもしれない。

## 8 安康前紀の軽の太子の暴虐と反乱

安康前紀の軽の太子の暴虐と反乱 允恭紀の允恭天皇二十四年から十八年後の安康前紀の允恭天皇四十二年の春正月に、允恭天皇が崩御する。そしてその年の冬十月に天皇の葬礼を終えた直後、軽の太子が「暴虐行て、婦女に淫け」という乱行を行い、皇位継承をめぐる政治問題化した。こうして弟の穴穂の皇子（後の安康天皇）との間で、軍事的な内乱まで引き起こしている。

安康前紀の本文 その安康前紀の本文は、次のとおりである。

冬十月に、葬礼畢りぬ。是の時に、太子、暴虐行て、婦女に淫けたまふ。国人誇りまつる。群臣従へまつらず。悉に穴穂に隸きぬ。爰に太子、穴穂の皇子を襲はむとして、密に兵を設けたまふ。穴穂の皇子、復兵を興して戦はむとす。故、穴穂括箭・輕括箭、始めて此の時に起れり。時に太子、群臣従へまつらず、百姓乖違へることを知りて、乃ち出でて、物部の大前の宿祢の家に匿れたまふ。

穴穂の皇子、聞しめして、則ち囲む。大前の宿祢、門に出でて迎へたてまつる。穴穂の皇子、歌して曰はく、

大前 小前宿祢が 金門蔭。

大前 小前宿祢の 金門の蔭に、

かく立ち寄らね。雨立ち止めむ。

(兵たちよ) こう立ち寄ってこい。ここに立って雨が止むのを待とう。

大前の宿祢、答歌して曰さく、

宮人の 足結の小鈴 落ちにきと

宮人の 脚結につけた小鈴が 落ちてしまったといって

宮人響む。里人もゆめ。

宮人たちが騒ぎ立てている。里人たちが軽挙妄動を慎みなさい。

乃ち皇子に啓して曰さく、「願はくは、太子をな害したまひそ。臣、議らむ」とまうす。是に由りて、太子、自ら大前の宿祢の家に死せましぬ。

(一)に云はく、伊予の国に流しまつるといふ。

## 9 衣通の王伝承といえない允恭紀と安康前紀の伝承

衣通の王伝承といえない允恭紀と安康前紀の伝承 以上の允恭紀二十三・二十四年の条は、美男美女の同母兄妹の相姦の話で、兄の一方的な恋心

艶妙し。太子、恆に大娘の皇女と合せむと念す。罪有らむことを畏りて黙あり。然るに感でたまふ情、既に盛にして、殆に死するに至りまさむとす。爰に以為さく、徒に空しく死なむよりは、刑有りとも雖も、何ぞ忍ぶること得むとおもほす。遂に竊に通ふ。乃ち悵懷少しく息みぬ。仍りて歌して曰はく、

あしひきの 山田を作り、  
山高み 下樋を走せ、  
下泣きに 我が泣く妻、  
片泣きに 我が泣く妻、  
今夜こそ 安く肌触れ。

(あしひきの) 山田を作り、  
山が高いので 水を引くための下樋を走らせた。  
そのように人知れず忍んで わたくしが慕い泣く妻、  
忍び泣きに泣いて わたくしが想う妻、  
今夜こそは 心安らかにその膚に触れることよ。

(紀69)

允恭紀二十四年の条の本文 允恭紀二十四年の条の本文は、次のとおりである。

二十四年の夏六月に、御膳の羹汁、凝りて氷となる。天皇、異びたまひて、其の所由をトへしめたまふ。トへる者の曰さく、「内の乱有り。蓋しは親親相奸けたるか」とまうす。時に人有りて曰さく、「木梨の軽の太子、同母妹軽の大娘の皇女を奸けたまへり」とまうす。因りて、推へ問ふ。辞既に実なり。太子は、是儲の君たり、加刑すること得ず。則ち大娘の皇女を伊予に移す。時に太子、歌して曰はく、

大君を 島に放り、  
舟余り い帰り来むぞ。我が暈ゆめ。  
言をこそ 暈と言はめ、我が妻をゆめ。  
又歌して曰はく、

大君を 四国の島に追放すると、  
(舟余り) 帰ってこようぞ。その間はわたくしの暈をそのまま守ってくれよ。  
ことばでは暈というが、実はわが妻、お前が潔斎して待つのだ。

(紀70)

天飛む 軽嬢子。  
甚泣かば 人知りぬべみ、  
幡舎の山の 鳩の 下泣きに泣く。

(天飛む) 軽の乙女よ。  
おまえがひどく泣くならば 人が知ってしまうだろうから、  
幡舎の山の 鳩のように 忍び泣きに泣くことだ。

(紀71)

允恭記の改作 地の文によると、右の二首も太子がうたったことになっている。しかし、〈大君を島に放りの歌〉(紀70)の「大君」は、伊予の「島に放」られた大娘にならざるをえない。とするとその大君は「大娘が「い帰り来む」ために「我が暈ゆめ」(わたくしの暈をそのまま守ってくれよ)と、大娘の暈を守るべき立場の太子が大娘にうたっていることになり、また「我が妻をゆめ」(わが妻は潔斎して待つのだよ)と、待つべき立場の夫の太子が大娘にうたっていることになる。これでは地の文と歌の辻褄がまるで合っていない。

これは「古代歌謡全注釈―日本書紀編―」「土橋寛」が説くように、右の二つの歌謡(紀70・71)が記紀共通であるため、紀の方が所伝(地の文)

てうたう歌である。確かに〈泊瀬の山の歌〉(記88)と〈泊瀬の川の歌〉(記89)は、葬儀場の祭具(泊瀬の山の幡・楸弓・梓弓、泊瀬の川の杵・鏡・真玉など)を羅列する長歌形式を取っている。

こうしてみると、この衣通の王と太子の悲恋の歌物語も笛や琴を伴奏にした歌劇仕立て、あるいは謡い物になっていよう。

即興の愛のデュエット それにしても衣通の王のうたった二首の絶唱Ⅱ〈あひねの浜の蠣貝の歌〉(記86)と〈山たづの迎への歌〉(記87)に歌曲名がないのは、なぜだろうか。『記紀歌謡全註解』『相磯貞三』は、「もとあつた歌曲名がただ記録される機会を得なかったに過ぎない」と説くものの、これでは何の解決にもならないだろう。この二首は衣通姫の思いあまつての絶唱なので、その激情を演じる度ごとに衣通姫役のアクトレスが即興で歌い上げた、とも想定できるのではなからうか。

この点、〈我が妻はゆめの歌〉(記85)にも歌唱法が記されていない。とすると、この歌も太子役のアクトが「わたくしを潔斎して待て」と即興で絶唱し、これに相呼応して衣通の王役のアクトレスが〈山たづの迎への歌〉(記87)で「潔斎して待つなどということはしないで、太子を迎えに行く」と、決然と直情的に即興でうたった、とも解しえる。すなわち、〈我が妻はゆめの歌〉(記85)、ならびに〈あひねの浜の蠣貝の歌〉(記86)・〈山たづの迎への歌〉(記87)は、心中を目前にする二人がデュエットとして即興でうたったものではなからうか。

管弦を伴った謡い物・歌劇 このように允恭記の衣通の王と軽の太子の恋物語は歌劇仕立てになっているので、『孫姫式』の一文「衣通比咩乃歌被管弦而猶存」は、この允恭記の芸能性の濃い衣通の王の伝承が平安初期まで継承されていたことを示している。

新嘗祭での饗宴の演目 では、この演目はいつ演じられたらうか。それはこの歌物語において允恭天皇の崩御によって次期天皇として即位すべき太子が失脚し、それでその弟の穴穂の皇子が安楽天皇として即位する箇所に示唆されている。すなわち、天皇の代替わりは新嘗祭(後世は大嘗祭になる)で行われるので、後世に催された新嘗祭の饗宴の場が、古の安楽天皇の劇的な代替わりのきっかけになった色好み譚が演じられるに相応しい、と考えられよう。そして弟姫の歌劇同様に、こうして演じられるなかでも、この歌劇はさらに洗練されたであろう。

記版の衣通姫 以上が、記版の衣通姫としての軽の大郎女の悲恋の歌物語である。

## 7 允恭紀の軽の太子と軽の大娘の伝承

允恭紀の軽の太子と軽の大娘 なお、允恭天皇(遠つ飛鳥の宮に天の下知らし雄朝婦稚子の天皇)の事跡を記した允恭紀二十三年と二十四年の条に、軽の太子と同母妹の軽の大娘の皇女との相姦が語られ、その結果、軽の大娘が伊予の国に流されている。ここで歌をうたうのは太子だけで、軽の大娘は何らの恋歌もうたっていない。そして、「軽の大娘の皇女も亦、艶妙し」と天性の美貌が述べられながらも、「衣通の大娘」とも「衣通の王」とも記されていない。

允恭紀二十三年の条の本文 その本文は、次のとおりである。

二十三年の春三月の甲午の朔庚子に、木梨の軽の皇子を立てて太子とす。容姿佳麗しく、見る者自ら感でぬ。同母妹軽の大娘の皇女も亦、

くした者の葬儀でうたわれた夫婦愛を主題にした葬歌である、と考えられる。すなわち泊瀬は大和の国の国中地方の人びとの葬りの地であり、この山や川で執り行われた葬儀では今は亡き伴侶が夫婦の墓地を選定し、同時に亡き伴侶の蘇生と鎮魂を願う葬歌をうたっていたようである。

**殯での招魂** 古代の葬儀は二段階で構成され、その前半部は殯（あらきともいう）という。その殯の原義は墓地に埋葬する前に遺骸を仮に収めておく所で、そこでは死者の蘇生を図る歌舞が伴っていた。〈泊瀬の山の歌〉はその歌舞だった、と想定できる。

これをもう少し詳述すると、〈泊瀬の山の歌〉の「幡」・「楳弓」・「梓弓」は招魂の呪具で、まずそれらの呪具のうちの幡を通じて招かれた、今は亡き伴侶の「つま（妻）」あるいは、「夫」の霊が、泊瀬の山の「大峰」に二人の「仲定める」（死者が籠ると同時にやがて死者となる連れ合いも仲良く籠ることになる）墓を占い定め、そしてまた伴侶を失ったベターハーフが招魂の呪具の楳弓と梓弓を通じてやがて「後も執りみる」（この先生き返らせてわたくしの手中に収めて自分のものとして世話をする）はずの「思ひつま（妻・夫）」（いとしい伴侶）の蘇生を祈願している。埋葬後の鎮魂 葬儀の後半部は死者の死を確認して埋葬し、そこでは死者の鎮魂を図る歌舞が伴っていた。〈泊瀬の川の歌〉はその歌舞だった、と想定できる。

これをもう少し詳述すると、〈泊瀬の川の歌〉の聖なる「斎杙」とそれに懸ける「鏡」と「真玉」は祓えの呪具で、これらで死穢の祓えをしたものであろう。そして、それらの呪物を通じてベターハーフの「吾が思ふつま（妻・夫）」（「吾が思ふ妹」も「吾が思ふ背」に置き換え可能）を賛美し、その復活が絶望的になったので、今となつては愛する伴侶のいない「家・国」（奈良盆地の国中）という生活空間に後戻りしたくない（すなわち、死者と共にありたい）と述べて、死者との惜別の真情を直情的に述べ、その鎮魂を図っている。

こうして死者と別れがたいと述べつつ、残された生者は元の住処である「家」・「国」（奈良盆地の国中）に戻って日常生活を送った、と想定される。

**愛の葬歌の転用** これらの葬歌としての元歌を転用して、衣通の王によって二人の墓所が選定され、太子はその衣通の王を「思ひ妻。あはれ」・「吾が思ふ妻」と恋慕し、都のある「国」の「家」を離れてしまった衣通の王と共にありたいと直情的にうたい、共に死ぬことよって二人の愛を全うしている。

## 6 記版の衣通姫の謡い物・歌劇

**歌劇仕立て** 以上の允恭記の太子と衣通姫がうたう歌には、幾つもの節名がついていた。『古代歌謡全注釈―古事記編―』『土橋寛』によると、「志良宜歌」とは「尻上げ歌」の義で、歌詞の終末句を繰り返す時、甲音に上げてうたうことである。「夷振の上歌」とは宮廷の楽府または雅楽寮における歌曲名で、〈天離る夷つ女の歌〉（紀3）の歌詞に基づく曲名で、この歌と同一の曲調でうたわれる歌である。そしてその「上歌」とは、一般の夷振よりも高い調子の歌か、と説いている。「宮人振」・「天田振」とは、「夷振」と同様に冒頭が「宮人の」・「天飛む」ではじまる歌曲名で、これらの歌と同一の曲調でうたわれる歌である。「夷振の片下」の「夷振」は前述のとおりであり、「片下」とは夷振の歌に本来同曲の本末があり、その本末のいずれかを低音でうたうことか、と説いている。「読歌」とは曲調の性質に関する名称らしく、朗読に近い曲調で物事を長々と羅列し

## 5 衣通の王と太子の情死

衣通の王、太子を追ひ、心中する これに続いて、衣通の王は太子を追ひ、心中するに至る。

かれ追ひ到りましし時に、待ち懷ひて歌ひたまひしく、

隠り処の 泊瀬の山の  
(隠り処の) 泊瀬の山の

大峰には 幡張り立て、  
大きな峰には 幡を張り立て、

さ小峰には 幡張り立て、  
小さな峰にも 幡を張り立て、

大峰にし 仲定める、  
そのうちの大きな峰に 夫婦仲 (二人の墓地) を占い定める、

思ひ妻。あはれ。  
わたくしのいとしい妻よ。ああ。

梶弓の 臥やる臥やりも、  
(梶弓の) 臥している時も、

梓弓 起てり起てりも、  
(梓弓) 立っている時も、

後にも執りみる 思ひ妻。あはれ。  
この先わたくしの手中に収めて自分のものとして世話をしようと思う、いとしい妻よ。ああ。

(記88)

また歌ひたまひしく、

隠り処の 泊瀬の川の  
(隠り処の) 泊瀬の川の

上つ瀬に 斎杵を打ち、  
上流の瀬に 斎み清めた杵を打ち、

下つ瀬に 真杵を打ち、  
下流の瀬に 立派な杵を打ち、

斎杵には 鏡を懸け、  
斎み清めた杵には 鏡をかけ、

真杵には 真玉を懸け、  
立派な杵には みごとな玉をかけ、

真玉如す 吾が思ふ妹。  
そのみごとな玉のように 大切に思う妻。

鏡如す 吾が思ふ妻。  
その鏡のように 大切に思う妻。

ありと言はばこそよ、  
その妻が家にいるというのならば、

家にも行かぬ。国をも思はぬ。  
家にも訪ねていこうし、故郷を懐かしくも思おう。しかし妻は家にはいないので、

(記89)

かく歌ひて、即ち共に自ら死せたまひき。かれこの二歌は、読歌なり。

泊瀬地方の葬歌 右の二首の〈泊瀬の山の歌〉(記88)と〈泊瀬の川の歌〉(記89)の元歌は、泊瀬地方でうたわれていた伝承歌で、連れ合いを亡



その衣通の王、歌を献りき。その歌に曰ひしく、

夏草の あひねの浜の

蠣貝に 足踏ますな。

明かして通れ。

かれ後にまた恋ひ慕ひあへずて、追ひ往く時に歌ひたまひしく、

君が行き 日長くなりぬ。

山たづの 迎へを行かむ。

待つには待たじ。

〔此に山たづと云へるは、是れ今の造木なり。〕

（夏草の） あいねの浜の

牡蠣の貝殻に 足を踏み込んでおけがをなさいますな。

ここで明かしてからお通りください。

（記86）

あなたの旅は 久しい日数になった。

（山たづの） お迎えに行こう。

このまま待つてはいられない。

（記87）

〔ここに山たづというのは、これは今の造木（接骨木）のことである〕

同母兄から一方的に求愛された当初は「その同母妹軽の大郎女に奸け」と本名で呼ばれていた「軽の大郎女」が、この条になると熱愛する太子に対して突如として「その衣通の王、歌を献りき」となっている。これは同母兄に求愛された時は困惑もあり、さほどの愛情も抱けなかったことを示しているよう。その後、次第に愛情が育まれ、太子が伊予の湯（道後温泉）に配流されるに及び、今まで秘めていた愛情が爆発的に迸り出たものであろう。それで流され人になって夜間にあひねの浜の危険な蛸殻を踏まされている太子をひたすら思いやっている（あひねの浜の蠣貝の歌）（記86）をうたう（なお、その元歌は夜間にあひねの浜で行われた歌垣において娘たちが若者たちを誘惑する恋歌であり、この独立歌謡を衣通の王の物語歌に転用したものである）。

そして、その太子をもう暫時も待てないので迎えに行くという、思いきった行為をする真情を（山たづの迎への歌）（記87）で述べることになる。このように夜間に執行された伊予への絶望的配流に至って堰を切ったように吐露された熱烈な恋歌は、二人の愛が最も高まり、燃え上っている場面だ、といえる。

**恋衣を通す恋のオーラ** こうしてみると、一般の恋人同志が恋衣を着て相逢い、その恋衣を重ねながら朝まで共寝していたように、この兄妹も引き裂かれるまでは恋衣を着、恋衣を重ねて共寝していたろう。そして兄が真夜中に伊予に配流されるにあたって、兄を切実に恋慕した妹の軽の大郎女は愛の極北を生きた官能的なオーラを身から放射し、それが恋の時間帯（夜）に着る色美しい恋衣を通して輝いた、とみるべきだろう。

したがって、「軽の大郎女、亦の名は衣通の郎女（御名を衣通の王と負はせる所以は、その身の光、衣より通し出づればなり）」とある「衣通の郎女・王」は、切なく恋慕している時間帯（夜）の恋のオーラが恋衣の色美しさと相俟って輝いている悲恋の「郎女・皇女」を意味しており、生来備えていた身体的な美質を昼夜分かたず輝かせる美女（麗し女）の日常の「郎女・皇女」のあり方ではない、と解すべきであろう。

また歌ひたまひしく、

天飛む 軽嬢子。

しただにも 寄り寝て通れ。

軽嬢子ども。

(天飛む) 軽の乙女よ。

こっそり 寄ってわたくしと寝ていきなさい。

軽の乙女たちよ。

(記83)

**政治的な闘争** 右の条の大前小前の宿祢が登場して宮人振を歌う段は、大前小前が歌舞を奏して芸能性を帯びているけれども、主題・話題は政略・謀略にあつてきわめて政治的である。太子は皇位継承の予定者だったので、当然のことながら近親相姦を犯す恋は皇位継承をめぐる謀略と闘いという政治的な闘争をもたらさずにはいられなかった。このようにこの条の前半部は、悲恋とは異質な政治的闘争を含みもつことになる。

**難解な後半の二首** 右の条の後半部の二首(記82・83)は、難解である。既に二人の恋愛関係は周知の事実で政治問題化までしているのに、大郎女が「甚泣かは人知りぬべし」(お前がひどく泣けば、世間の人が知ってしまう)とうたったり、一人しかいない大郎女にむかつて「軽嬢子ども」と複数形で呼びかけたり、今さら「しただに寄り寝て通れ」(こっそり寄ってわたくしと寝ていきなさい)とうたったりするのは、理解に苦しむ。

**太子が伊予に配流** しかし次のように、太子が伊予の湯に配流される条からは、以前と同様に二人だけの悲恋物語に戻り、その悲劇性が濃密になつていく。

かれ、その軽の太子をば伊予の湯に流しまつりき。また流されたまはむとせし時に歌ひたまひしく、

天飛ぶ 鳥も使ひぞ。

鶴が音の 聞こえむ時は、

我が名問はさね。

この三つの歌は天田振なり。

また歌ひたまひしく、

大君を 島に放らば、

船余り い帰り来むぞ。我が暈ゆめ。

言をこそ 暈と言はめ。我が妻はゆめ。

空を飛ぶ 鳥も使者なのだよ。

鶴の声が 聞こえる時には、

わたくしの名をいって わたくしのことを尋ねてくれ。

(記84)

大君であるわたくしを 四国の島に追放しても、

(船余り) 帰ってこようぞ。その間はわたくしの暈をそのままにして齎み慎んでいなさい。

ことばでは 暈というが、実はわが妻 お前自身が潔斎して待つのだよ。

(記85)

#### 4 衣通の王の絶唱

衣通の王の絶唱 これに続いて、衣通の王は次のように太子を思い遣る絶唱をうたう。

たしだしに 率寝てむ後は、  
人は離ゆとも。

愛しと さ寝しと寝てば、

刈薦の 乱れば乱れ。

さ寝しと寝てば。

こは夷振の上歌なり。

そのように確かに 共寝をした後は、  
あなたがわたくしから離れていつてもかまわない。

愛しいままに 寝さえたならば、

(刈薦の) ばらばらに離れるのなら離れてもかまわない。

寝さえたならば。

(記79)

### 3 太子の失脚

太子が捕われる この兄妹相婚によって太子は失脚し、実の弟の穴穂の御子(後の安康天皇)によって攻略されている。その本文は次のとおりである。

ここをもて百の官をはじめて天の下の人等、軽の太子に背きて穴穂の御子に帰りき。かれ軽の太子畏みて、大前小前の宿衾の大臣の家に逃げ入りて、兵器を備へ作りたまひき。「その時に作れる矢は、その矢の先を銅にしたり。かれその矢を軽箭と謂ふ。」穴穂の王子もまた兵器を作りたまひき。「この王子の作らせる矢は、即ち今時の矢なり。それを穴穂矢と謂ふ。」ここに穴穂の御子軍を興して、大前小前の宿衾の家を囲みたまひき。かれその門に到りましし時に、大氷雨零りき。かれ歌ひたまひしく、

大前 小前宿衾が 金門蔭

大前 小前宿衾の 金門の蔭に

かく寄り来ね。雨立ち止めむ。

こう寄ってこい。ものどもよ。ここに立つて雨の止むのを待つとしよう。

(記80)

ここに大前小前の宿衾、手を挙げ膝を打ち、儼ひ奏で、歌ひつつ参来り。その歌は、

宮人の 足結の小鈴 落ちにきと

宮人の 脚結につけた小鈴が 落ちてしまったといつて

宮人響む。里人もゆめ。

宮人たちが騒ぎ立てている。里人たちも軽挙妄動を慎みなさい。

(記81)

この歌は宮人振なり。

かく歌ひつつ参帰て白ししく、「我が天皇の御子、兄の王をな攻めたまひそ。若し攻めたまはば、必ず人咲はむ。僕捕へて貢進らむ」と申しき。かれ兵を解めて退きましき。かれ大前小前の宿衾、その軽の太子を捕へて、率て参出でて貢進りき。

その太子、捕へられて歌ひたまひしく、

天飛む 軽の嬢子。

(天飛む) 軽の乙女よ。

甚泣かば 人知りぬべし。

おまえがひどく泣くならば、人がわたしたちのことを知ってしまうだろう。

波佐の山の 鳩の 下泣きに泣く。

わたくしはそれに気づかって、波佐の山の 鳩のように 忍び泣きに泣くことだ。

(記82)

**三つの名称** そして、これに続いて展開する軽の太子と軽の大郎女の恋物語を辿ってみると、右の「軽の大郎女」・「衣通の王」・「衣通の郎女」の三つの名称のうち、本名の「軽の大郎女」の表記は軽の太子が「同母妹」の「軽の大郎女に奸け」たと記す一例、「衣通の王」の表記は「同母兄」の「軽の太子」との恋について沈黙してきた大郎女が激しく兄への愛情を吐露して「あひねの浜の蠣貝の歌」(記86)と「山たづの迎への歌」(記87)を太子に奉ったことを記す「衣通の王、歌を献りき」の一例、そして「衣通の郎女」の表記はどこにも見当たらない。

**核心は「衣通」** しかし、本名の「軽の大郎女」が恋する女の極北を生けると「衣通の王」となり、それは「軽の衣通の王」といつてもよく、「軽の衣通の郎女」といつてもよいことになる。とすると、要は激しく恋に落ちていている者に「衣通」というキーワードを用いていることが肝要であり、その「衣通」の真の意味・由来を知ることによって「衣通姫」の伝承の主題が明晰になるだろう。その三つの名称のあり方は、允恭紀の恋の場における「衣通の郎女」とそれ以外の場における本名の「弟姫」の使い分けと同じである。

## 2 軽の太子と軽の大郎女の恋の展開

**軽の太子と軽の大郎女の条** 允恭記の軽の太子と軽の大郎女の条は、十二首の歌を二歌一組にして六回反復しながら歌劇仕立てに点綴した歌物語になっており、その文芸的な密度・質はかなりの高みに達している。

しかし後代からみると辻褄が合わない箇所もあり、合理的な解釈にこだわると厄介な問題に突き当たってしまう。本節ではそれらの問題に一言及しないで、「衣通姫」に焦点を絞りながらこの条の展開を辿ってみる。

**太子の密通** 物語は、次のように父帝の允恭天皇の崩御と時を同じくして軽の太子(皇位継承者)が引き起こした同母妹の「軽の大郎女」への姦通(近親婚)から始まる。

天皇(允恭天皇)崩りまして後、木梨の軽の太子、日継知らしめすに定まれるを、未だ位に即きたまはずありし間に、その同母妹軽の大郎女に奸けて、歌ひたまひしく、  
あしひきの山田を作り、  
山高み下樋を走せ、  
下問ひに我が問ふ妹を、  
下泣きに我が泣く妻を、  
今夜こそは安く肌触れ。  
こは志良宜歌なり。

(あしひきの) 山田を作り、  
山が高いので 水を引くための下樋を走らせた。  
それと同じく ひそかに わたくしが言い寄る妹に、  
人目を忍んで わたくしが慕い泣く妻に、  
今夜こそは 心安らかにその膚に触れることよ。

(記78)

また歌ひたまひしく、  
笹葉に 打つや霰の、

笹の葉に 打つ霰の音が たしだしと聞こえるが、

岩に生える苔こけから僧の遍照の着ている墨染めの僧衣を「苔こけの衣ころも」と巧みに言い換え、その「苔こけの衣ころも」＝僧衣を貸してもらえれば寒さをしのげる、と洒落しやれている。

**答歌の歌意** 出家する以前には恋衣を着て恋愛三昧であつた風流人の遍照（良岑の宗貞）は、この「苔こけの衣ころも」＝僧衣に恋衣を嗅くぎ取り、次のように答えた。世捨て人のわたしの着る「苔こけの衣ころも」は、出家者の常として粗末なので一重しかない。しかし貸さなければ疎うとすぎる、不親切だといわれしてしまうので、この「苔こけの衣ころも」を二人が共寝した上に着れば、あなたの願いがかなう、と戯れている。すなわち、「苔こけの衣ころも」＝僧衣は「世よ＝俗世間」を「背そむく」ものであり、同時に「世よの中なか」（男女の仲）と縁を切るものでもあるけれども、成り行き上、あなたの求める寒さしのぎのためにはこの僧衣を俗世の「恋衣」にして「世よの中なか」（男女の仲）に身を投じる（世に背かないようにする）しかない、といっている。

**「苔こけの衣ころも」＝恋衣** この贈答歌の「苔こけの衣ころも」＝僧衣は「恋衣」の裏返しになっており、この贈答歌の「苔こけの衣ころも」には宗教的な悟りと俗世間の男女の仲という真逆の世界が、同時に表現されている。そのあり方は、〈葉狩りの紫の贈答歌〉（万20・21）で狩りの小忌衣（きこころも）と恋衣（こひころも）が同時に表現されるあり方と似ている。

**「苔こけの衣ころも」から恋衣へ** 小町の古今歌は、仁明天皇との数少ない逢瀬しかなかった身を焦あせがす悲恋の姫＝「衣通姫」としての歌であり、次いで「麗くはし女め」ぶりの衰えがうたわれていた。そしてその次の段階に來ると予想されるのは、僧衣（苔こけの衣ころも）を着る小町の尼姿、あるいは老残の姿＝「衣通姫」の成れの果て（野ざらしの鬻しやれ）であつた。

しかしここでの小町の歌物語では、「苔こけの衣ころも」は恋衣に見立てられるという、浮いたものになっている。すなわち、「衣通姫」としての悲劇的な小町を造形する古今歌に対して、その半世紀後の小町と遍照の贈答歌は、仏教色の強い「苔こけの衣ころも」を恋衣に見立てるという逆転発想をして、ユーモアに溢れた洒脱なものに変容している。そこには満ち足りた麗はし女め・賢さかし女めとしての小町が面目躍如としており、陰の女として悲恋に生きざるをえなかった衣通姫の寂しい像のかけらも見られない。こうしてみると後世に造型された小町像は、けっして老残ばかりではなかったようである。

## 五 奔放型の軽の大郎女

### 1 もう一人の「衣通姫」

もう一人の「衣通姫」上代文学には、もう一人の「衣通姫」がいる。それは、允恭記に伝承される同母兄の「軽かるの太ひつぎ子のみ」と禁じられた恋をした「軽かるの大郎女おはいらつめ」で、彼女は「衣通そとほしの郎女いらつめ」とも「衣通そとほしの王みこ」とも称されている。

**「衣通そとほしの郎女いらつめ」・「衣通そとほしの王みこ」の由来** 「一はじめに」で前述したように、允恭記の冒頭の後妃と御子の条で「軽かるの大郎女おはいらつめ」が「衣通そとほしの王みこ」といわれた由来を、次のように記している。

軽かるの大郎女おはいらつめ、亦またの名は衣通そとほしの郎女いらつめ（御名を衣通そとほしの王みこと負はせる所以は、その身の光ひかり、衣そより通とほし出いづればなり）



唱和した）などという究極の小町の老残譚をも語り出すことになる。

## 6 古今版の衣通姫の謡い物・歌劇

残りの小町歌五首 以上、小町の古今歌の十八首中、〈をろかなる涙の歌〉（古今557）・〈秋の夜の歌〉（古今635）・〈浦見むの歌〉（古今727）・〈人の心の花の歌〉（古今797）・〈あはれてふ言の歌〉（古今939）の五首は、「衣通姫の流」と無縁と思われたので、考察の対象から除外した。

管弦を伴った謡い物・歌劇 「一 はじめに」で前述したように、『孫姫式』「九〇〇年の中頃成立、孫姫は小町に比定」の一節では、衣通姫の歌には管弦を伴っており、謡い物・歌劇として今もなお伝承されている、と述べられている。とすれば、この歌論書の著者と目される小町（孫姫）が「衣通姫の流」なので、八〇〇年代の中期ごろに活躍した小町の恋歌も当然のこととして、謡い物・歌劇仕立てになっていたであろう。

古今版の衣通姫 以上が、古今版の衣通姫としての小野の小町の悲恋の歌群である。

## 7 「苔の衣」から恋衣へ

〈苔の衣の贈答歌〉 なお、『古今集』の成立からほぼ半世紀を経て成立した『後撰集』（九五一年成立）には、小町と遍照との間に交わされた〈苔の衣の贈答歌〉（後撰1195・1196）が、次のように収められている。この贈答歌には僧衣と恋衣の洒脱な読み替えが見られ、恋に生きた円満な小町像がのびのびと描かれている。

石上といふ寺に詣でて、日の暮れにければ、夜明けてまかり帰らむとて、止まりて、「この寺に遍照侍り」と人の告げ侍りければ、もの言ひ心見むとて、言ひ侍りける。 小野の小町

岩の上に 旅寝をすれば、いと寒し。  
苔の衣を 我に貸さなむ。

（後撰1195）

返し

遍照

世を背く 苔の衣は ただ一重。  
貸さねば疎し。いざ二人寝む。

世を離れた 僧の着る苔の衣は ただ一重だけのもの。  
さりとて貸さなければ薄情に過ぎる。この一枚の衣を掛けてさあ共寝をしよう。

（後撰1196）

## 贈歌の歌意

小町は大和の石上寺に旅泊したので、「岩の上に旅寝をすれば」と戯れている。そして岩の上なのでここで寝ると「寒し」となり、

今はとて 我が身時雨に ふりぬれば、  
言の葉さへに うつろひにけり。

相も変わらず 足繁く通ってくる。

(古今623)

秋風に あふ田の実こそ 悲しけれ。  
我が身空しく なりぬと思へば。

今はもう、秋の時雨が降るとともに、わたくしも古びてしまった。  
だから野山の木の葉ばかりか、あなたの言葉まで、すっかり衰えて  
頼り甲斐がなくなってしまった。

(古今782)

秋の大風に 吹きまぐられる田の実は、とても悲しい。頼みにしていた恋人に飽きられ、  
空しい身ぞらとなった わたくしの身のことを思い合わせると。

(古今822)

愛の不毛への嘆き どの歌も複雑な縁語や懸詞の修辞を施し、口訳も長くならざるをえなくなっている。これらの衰える「我が身」をうたう歌は、  
愛の不毛に対する嘆きに溢れている。

## 5 小町の老残

〈身をうき草の歌〉 艶し女ぶりの衰えを嘆く〈花の色は移りの歌〉(古今113)や〈我が身の歌〉三首(古今623・782・822)の延長線  
上にあるのが、次の〈身をうき草の歌〉(古今938)であろう。

わびぬれば 身を浮き草の 根を絶えて  
誘ふ水あらば 往なむとぞ思ふ。

心楽しまないこの頃、つくづくこの身が憂いものになった。いつそ浮き草のように  
ふつりと根を絶ち切って、誘う水があれば いずこへでも行こうと思う。

(古今938)

文屋の康秀が三河の掾(三等官)になって都を下る時、小町に「県見(地方見物)にはえ出で立たじや」と誘った時、小町が右の〈身をうき草  
の歌〉(古今938)を返したという。

衣通姫の成れの果て この歌では社交的に誇大化されているかもしれないものの、恋の対象にされないほどに「身の憂き」者になった小町自身の  
成れの果てが見通されている。恋のオーラ(霊気)を最も放つ「麗し女」の「衣通姫」の嘆きは、恋の最大の障害になる「我が身」の老衰にある。  
仁明天皇との秘めた恋に若い時に身を焦がした小町がその最たる例であり、小町は衣通姫の成れの果てを見つめざるをえなくなつて、深い嘆きの  
淵に佇むことになる。

小町の老残譚 こうした小町によって深化された「麗し女」ぶりの喪失感、歌を巧みに詠んで男の気を引く「賢し女」ぶりだけを残す小町老残  
譚へと展開する。

そして無残にも野ざらしの髑髏になった小町が、〈あな目の歌〉(「秋風の吹くにつけても(「秋風のうち吹くごとく」とも) あなめあなめ。小野  
とは言はじ(「小野とはなくて」とも)「小野とはならじ(ず)」とも) 薄生ひけり。」をうたった(あるいは、それを見聞した業平が小町の歌に

定家によって小倉百人一首にも選ばれている。

花の色は うつりにけりな。徒に  
我が身世にふる ながめせしまに。

花の色は 衰えてしまい、同時にわたしの容色も 色褪せてしまった。  
春の長雨が降り、わたしは世を過ごすための空しい心づかいにかまけて  
花を見る余裕もなかった、そのうちに。

(古今113)

上二句の「花の色はうつりにけりな」は、桜の花を見てわが人生における容色の衰えに気付いたというものである。助動詞の「けり」は容色の衰えへの気付き・驚きであり、終助詞の「な」はその気付きをさらに強調している。下二句は、自分の恋のさまざまな経緯にかまけている中に、という己の生き方への振り返りである。

**桜花Ⅱ色香の称賛** ここで、小町の〈花の色は移りの歌〉(古今113)と允恭天皇の〈花妙し桜の歌〉(紀67)の類似点と相違点に注目してみた。

允恭天皇の愛でた桜は天皇が弟姫と相会する場に咲き初めており、桜花を瞩目しながら、その桜によって今眼前にいる弟姫の麗し女ぶりを称賛している。そして二人の逢瀬が十二月から翌年の二月に延期しただけでも、「同愛では早くは愛です。我が愛づる子ら」(同じく愛するなら早くから愛すればよかったのに。わたしの愛する姫をば)と、弟姫の若さを最大の魅力として珍重している。このように天皇が好迷の麗し女ぶりを称賛することは、色好みの王のなすべき嗜みであった。

**桜花Ⅱ色香の衰え** これに対して小町のうたう桜の歌は、長々と降りしきる雨に濡れて無残に色香をなくしており、そしてこの桜花によって恋しい仁明天皇との逢瀬がないまま麗し女ぶりを失っていく自分の色香の衰えを嘆いている。

このようにこの両歌には、基本的に桜を麗し女に見立てて愛でる共通点をもちながらも、その咲く桜と散る桜を麗し女の盛衰に譬える相違点もある。この二つの桜の歌は、ともに桜によって衣通姫を造形しているながらも、時代的な差があり、弟姫の容色の衰えをもたらす二か月の待つ時間と、小町の容色の衰えをもたらす際限のない待つ時間には、格段の悲哀の落差がある。確かにこの二人の衣通姫は自分たちより身分の高い女性たちの圧迫によって天皇を待つだけの存在だったけれども、この二人は待つばかりの悲哀を歌にしつつも、待つことの悲しみ・無惨さをより深化させて悲歌に仕立て上げたのは、後世の小町であった。

**衰える「我が身」の歌** 前出の〈花の色は移りの歌〉(古今113)でうたわれる「我が身」は、小町歌でさらに次の三首に取り上げられ、いずれも「麗し女」ぶりの衰えを述べている。

みるめなき 我が身をうらと 知らねばや、  
かれなで海人の 足たゆく来る。

海松布の生えない 浦だとも知らず、愚かな海人はしきりに足を運んで来る。  
あなたもまったく同じこと。見るほどの美貌もない わたしの身が 憂鬱だと知らないのか、

〈走り火に心焼く歌〉（古今1030）は仁明天皇との逢瀬に心身を燃やす歌で、正に恋情のオーラが鮮烈に放たれている。すなわち、「月なし」に「付きなし」（手だて・手がかりがない）を懸け、「思ひおきて」に「火」・「熾火」（真つ赤に熾った炭火）を懸け、「胸はしり火」に「走り火」（熾火からはね飛ぶ火の粉）を懸け、月のない闇夜の飛火という閃光が恋情の炎となって輝きわたっている。

〈熾火のゐて身を焼く歌〉（古今1104）の上三句は、〈走り火に心焼く歌〉（古今1030）の変奏で、やはり恋情の炎の輝きを述べている。そして小町にとって、仁明天皇との愛の隔たりは、都と遠い島ほどのとつともない距離であった。

〈激情的な歌と遊戯的な歌〉ただし、〈走り火に心焼く歌〉（古今1030）は俳諧歌、〈熾火のゐて身を焼く歌〉（古今1104）は物名に分類されている。すなわち、古今集の編者はこの二首を遊戯的な歌で、滑稽・卑俗の語や修辭をわざとこちたく濫用した歌と見做している。

しかしこれらの歌が本来その種の歌だったとばかりも言えないのではなからうか。激情を歌にすると修辭に凝つてどこか規則外の体をなすことがあるうか、と思われる。例えば、伊勢のうたった「難波なる長柄の橋もつくるなり。今は我が身を何にたとえむ。」（古今1051）は、俳諧歌に分類されているものの、哀れきわまりない老いの感慨を述べた名歌として知られている。

以上のように〈走り火に心焼く歌〉と〈熾火のゐて身を焼く歌〉は、允恭紀の〈ささがねの蜘蛛の歌〉（紀65）と〈海の浜藻の歌〉（紀68）に匹敵する悲恋の女性の激情的な絶唱とみるべきであろう。

#### 4 麗し女ぶりの衰え

麗し女と賢し女 英雄や天皇の行使すべき色好みの対象・好速は、神代記の「神語」の〈八千矛の神の求婚の歌〉（記2）が述べるように、基本的に神女であるけれども、同時に「麗し女」（肉体的な美質をもつ女性）であると共に、「賢し女」（相手の気を逸らさない気の利いた女性）であることが、求められている。この才色兼備のうち、才は年齢を重ねても衰えない（あるいは年齢を重ねるほどに優れる）けれども、色は年齢を重ねると忽ちのうちに衰退してしまうのが普通であろう。

麗し女ぶりの有無 なお、「二三 忍耐型の弟姫」で前述した允恭紀の衣通の郎姫の伝承の背景には、右の王の好速のもつべき要件のうちの神女の麗し女ぶりが横たわっていたらう。すなわち、本来最高神女としての皇后（忍坂の大中つ姫）が新嘗祭の一夜の聖婚に臨むべき役目を、若い神女の「麗し女」の弟姫に取って代わられていたのは、皇后が麗し女としての色を欠いていたことによるのだろう。

そしてこれに対して、雄略記における吉野の童女の聖婚が童女の神舞の後にあるべきなのに、これが逆になっているのは、童女の麗し女ぶりが飛び抜けて優れていたことを示していよう。

麗し女ぶりの衰え こうしてみると、基本的には小忌衣を着る神女としての立場を基盤にする、吉野の童女や弟姫のような飛びつきの麗し女の小町にしても、月日が経てば仁明天皇との愛の交歓がないまま肉体的な輝きを保ちえないことになる。そしてこれが、小町の大いなる嘆きの種になる。

〈花の色は移りの歌〉 次に挙げる〈花の色は移りの歌〉（古今1113）は、こうして愛に満たされないまま麗し女ぶりの衰退を嘆いた代表例で、

白妙の 袖折り反し 恋ふればか、  
妹が姿の 夢にし見ゆる。

(白妙の) 袖を折り反して 恋しがって寝たからか、  
あの娘の姿が 夢に見える。

(万2937)

夢の世界での充足 「小野小町的なもの」「秋山虔」は、『古今集』巻十二、恋歌二の冒頭に、〈夜の衣を反す歌〉(古今554)を含む三首が束ねられていることに注目して、次のように説く。

夢にその人に逢うべく夜の衣を反すという直截断言的なこの歌の風体は、現実での逢瀬への期待の断止と表裏するのではないか。現実での切実な願い、しかもその願いのかなえられぬという事態なるがゆえに、それを夢の世界ははっきりと切りかえようとし、(中略)小町は、実人生での恋の願望を切りすて、夢の世界での充足へと思いをせめてゆく。そうするよりすべのないような恋の経験を彼女はいだかされた。

右の言説は小町の夢の歌六首全般にいえることで、秋山は彼女の歌が類型的な夢の歌を越えて個性をもつ独特なものになっている、とも説く。「人目を守る」天皇〈人目を守る歌〉(古今656)によると、仁明天皇は皇后や女御たちの「人目を守る」(人目を憚って逢いに来ない)ことをしている。また、〈夢路をさへ人は咎めじの歌〉(古今657)から、小町が天皇の召しによって天皇の許に通うことを、皇后や女御たちが「咎め」ていた、とわかる。

この皇后などの高位の妃たちに対する仁明天皇の気配り・遠慮は、皇后の忍坂の大中つ姫の嫉妬に気兼ねして弟姫との逢瀬を減らす允恭天皇のあり方と同じである。また小町は、上位の姫君たちの「咎め」に配慮しなければならないのも、弟姫のあり方と同じである。これらの点で、小町は「弟姫」＝「衣通姫」の「流」である、といえる。

### 3 恋のオーラの発露

恋のオーラの発露 では、右の「夜の衣」＝恋衣を通すほどの恋のオーラ(霊気)を発露させていると直ちに感受できるほどの激しい恋歌は、彼女の歌のなかにあるだろうか。その典型例は、さしずめ次の二首であろう。

人に逢はむ 月のなきには、思ひおきて  
胸はしり火に 心焼けにけり。

恋人に逢う手だてもなく、月も出ない闇夜には、恋心が燃えさかり、  
胸の中をばちばち飛び走る。その火を焼きながら わたしは騒ぐ思いでひとり起きている。

(古今1030)

熾火のゐて 身を焼くよりも かなしきは、  
都鳥への 別れなりけり。

真つ赤に燃える火を置いて 身を焼くよりも 切ないことは、  
都と遠い鳥の間に 引き離されてしまうことだ。

(古今1104・墨滅歌)



## 題知らず 小野の小町

思ひつつ 寝ればや人の 見えつらむ。  
夢と知りせば 覚めざらましを。

(古今十二—552)

うたた寝に 恋しき人を 見てしより、  
夢てふものは 頼みそめてき。

(古今553)

いとせめて 恋しき時は、むばたまの  
夜の衣を 反してぞ着る。

(古今554)

## 題知らず

現には さもこそあらめ。夢にさへ  
人目を守ると 見るが寂しさ。

(古今656)

限りなき 思ひのままに 夜も来む。  
夢路をさへに 人は咎めじ。

(古今657)

夢路には 足も休めず 通へども、  
現には一目 見しことはあらず。

(古今658)

「夜の衣」Ⅱ恋衣 まず、〈夜の衣を反す歌〉(古今554)に注目したい。恋を語らう時間は、日の暮れから夜明けまでの夜間である。更衣の小町は現実にはなかなか仁明天皇に逢えなかったとしても、いつでも逢えるように夜通し恋衣を着ていたであろう。また現実には逢えないとしても、夢で愛しい人Ⅱ仁明天皇に逢おうとしているので、小町は恋衣を着て床に就くなり、うたた寝をしていたろう(うたた寝の歌)(古今553)参照)。とすると、〈夜の衣を反す歌〉(古今554)の「夜の衣」は恋衣の言い換えということになる。

そしてその「夜の衣」Ⅱ恋衣を反して寝ると恋人に逢えるという恋愛の呪術があったので、小町は仁明天皇との逢瀬を願ってこの呪術をし、その愛の行為をうたったのが〈夜の衣を反す歌〉(古今554)であった。

万葉歌の袖反し この恋衣を反して寝る恋愛習俗は、前代の万葉歌にも詠まれている。その代表例を次に示す。

我妹子に 恋ひて術なみ、白妙の  
袖反しは、夢に見えきや。  
吾妹子が 袖反す夜の 夢ならし。

(万2812)

まことも君に 逢へりしごとし。

(万2813)

一途に思いながら 寝たのであの方が 夢に見えたのだろう。

もし夢とわかっていたなら 目を覚まさないでいたのに。

うたた寝の夢枕に 恋しい人を 見てからは、

儚い夢をさえ 頼りにするようになった。

とても身に迫るほど 恋しい時は、あの人を夢に見たいと願って

夜の衣を 裏返して着る。

目が覚めている間なら、それもしかたがない。しかし夢にまで

人目を憚って逢いに来ないと見るのは、悲しいことだ。

限りなく 恋しさが募るままに せめて夜の夢なりと あなたの所へ通いたい。

夢の通い路まで 人は咎めないだろうから。

夢の通い路は 足を休めることもなく 通うけれども、

現実にその姿が一目 見る喜びにはかなわない。

## 四 忍耐型の小町

### 1 仁明天皇と小町の悲恋

**小町更衣説** 『王朝の映像』『角田文衛』などによって主唱された小町更衣説は、『在原業平・小野小町』『片桐洋一』・『小野小町追跡』『片桐洋一』に継承され、現在ほぼ通説化している。この説は、小野の小町が仁明天皇（その在位は八三三～八五〇）の後宮の更衣の立場にあり、その本名が小野の吉子で、その活躍の場は仁明朝の宮廷サロンだったという。

本論は基本的に、この片桐の小町更衣説を踏襲する。

**小町の名称由来** 小町の「町」は、仁明・文徳の時代において更衣を尊敬した呼称である。この「町」は、後宮の常寧殿の区切りを「后町」と呼称したことに由来している。更衣より上位の皇后や女御たちがそれぞれに殿舎を賜るのに対して、それよりも下位にある更衣たちは常寧殿のなかの曹司に住んでいた。そして、同じ更衣である年長者（姉か）の小野氏出自の「小野の町」と区別するために、「小野の小町」と呼ばれたらうという。

**小野の吉子** 小野の小町の本名が小野の吉子だと推定したのは、次の史実を根拠にしている。すなわち、『続日本後紀』承和九年正月八日の条に、仁明天皇の後宮にいる二人の無位の女性―藤原の朝臣賀登子と小野の朝臣吉子が同時に正二位を授けられた、と記されている。そして更衣の立場にあった賀登子は仁明天皇との間に国康親王を生んでいるので、小野の吉子もまた仁明天皇との間に皇子・皇女を生んでもいい立場の更衣だったろう、とみている。

**美しすぎる更衣の人生** 『源氏物語』桐壺の巻で語られているように、桐壺の更衣は桐壺の帝の絶大な寵愛を受けるものの、後宮にいる皇后、女御以下の妃たちによって嫉妬に起因する悪質な攻撃を受け、輝くような皇子（光源氏）を設けながらも病をえて早世している。

「小野小町説話の基層」「塚本澄子」が説くように、「美しすぎる更衣の人生は、帝が皇后に遠慮すれば衣通姫の、のめりこめば源氏物語の桐壺の更衣のような、いずれにしても嘆きの人生に」なってしまう。『古今集』序が小町を「衣通姫の流」といつているので、小町は帝や皇后などに遠慮して允恭紀の弟姫衣通の郎姫のようになった、ということになる。小町と仁明天皇との逢瀬は、桐壺の帝と桐壺の更衣の熱愛とは真逆で、仁明天皇の妻訪いは数えるほどしかなく、小町は天皇の妻訪いをひたすら待つしかなく、不安と愁いに満ちていたことになる。

### 2 夢での逢い

**恋の夢の歌人** そこで小町は、夢の中でしか恋しい人（仁明天皇）に逢えない辛さを訴えることになる。『古今集』に収められている小町の歌十八首のうちの十三首は恋歌であり、そのうちの六首が夢の歌である。夢をうたう『古今集』の歌は十八首で、小町の夢の歌六首はその三分の一を占めているので、小町は恋の夢の歌人といってもいい位である。

次に、その夢の歌六首を記す。このうち先に記す三首と後に記す三首は、それぞれに連作の趣をもっている。

人、浜藻を号けて、奈能利曾毛と謂へり。

衣通の郎姫は、恋しい天皇が海浜の藻のように気紛れのようにしか寄ってくれない、と嘆いている。ところが、かつて藤原の宮で口にした絶唱「ささねの蜘蛛の歌」(紀65)が皇后に知られて二人の逢瀬が制約されているので、「海の浜藻の歌」(紀68)の存在も外聞を憚らなければならぬ、と天皇は気遣いをする。こうして恋人・天皇の比喩として「海の浜藻」をうたった恋歌は、皇后の嫉妬を恐れた天皇によって「是の歌、他人にな聆かせそ」とその恋を一層秘めることになる。

「なのりそ」Ⅱ海藻のほんだわら　そしてさらに、この秘めたる恋の経緯は世間の同情を買って評判になり、「海の浜藻の歌」(紀68)を天皇が「他人にな聆かせそ」といったことが「な告りそ」(どうか言わないでほしいの義)に言い換えられ、「衣通の郎姫」のうたった「海の浜藻の歌」(紀68)の「浜藻」(天皇の比喩)は「なのりそ」(海藻のほんだわら)の名称の由来になった、と語っている。このように、浜でよく目にするなんの変哲もない「なのりそ」までが、秘めた高貴な方がたの哀切な恋で染め上げられている。

藤原部の設置　そして最後に、天皇は「朕が心に異に愛しとおもふ」衣通の郎姫の名を後世に伝えようとして、姫がかつて住んでいた藤原に因んで「藤原部」という御名代を設けた、と結んでいる。

忍耐型の悲恋の姫　以上、允恭紀の「衣通の郎姫」は、皇后に圧迫されながらも皇后と天皇に徹底的に気遣いをして耐え忍び、天皇を熱烈に恋慕して恋の絶唱を詠み、その折には恋のオーラが細紋形の紐をつけた小忌衣・恋衣を通して光り輝いていた。このように允恭紀の衣通の郎姫は、忍耐型の悲恋の姫として造型されている。

## 6 紀版の衣通姫の謡い物・歌劇

管弦を伴った謡い物・歌劇　「一 はじめに」で前述したように、『孫姬式』「九〇〇年中頃成立、孫姫は小町に比定されている」の一節に、衣通姫の歌には管弦(笛や琴)を伴っており、謡い物・歌劇として今もなお伝承されているという。とすれば、允恭紀の衣通の郎姫と允恭天皇の恋歌の贈答は、書紀の成立時期(七二〇年代)は素より、平安初期に至っても謡い物・歌劇仕立てになっていた、とわかる。

新嘗祭の饗宴の演出　では、この演出はいくつ演じられたであろうか。それはこの歌物語のはじまりに示唆されている。すなわち、歌物語の発端が冬至祭を境として催された新嘗祭であったので、後世に催された新嘗祭の饗宴の場が、古の允恭天皇のこの新嘗祭をきっかけにした色好み譚が演じられるに相応しい、と考えられたろう。そしてこうして演じられるなかでも、この歌劇はさらに洗練されたであろう。

紀版の衣通姫　以上が、紀版の衣通姫としての悲恋の歌物語である。

右の〈細紋形錦の紐の歌〉(紀66)において「細紋形錦の紐を解き放けて数多は寝ずに、ただ一夜のみ」とうたうのは、恋衣の「錦の紐」を解いて神女の一夜妻と聖婚を交わす秘儀を基盤にしているよう。この聖婚は、本来十二月の新室の宴の一夜に限るべきものであったけれども、翌年の二月まで延期されていたことが、この歌からわかる。

「細紋形錦の紐」は一夜の聖婚の場で着用された小忌衣・晴衣・恋衣であり、「衣通の郎姫」の「衣」の実態の一端がこの十二月の新嘗祭にとともに聖婚の場を述べる歌に端なくも露出しているのは、僥倖であった。

その一夜の聖婚における小忌衣・恋衣としての「細紋形錦の紐」のあり方は、五月五日の葉狩りにおける小忌衣・恋衣としての〈葉狩りの紫の贈答歌〉(万20・21)の「紫衣」のあり方と同じ線上にある(花妙し桜の歌)(記67)については「四 忍耐型の小町」で後述)。

## 5 茅渟の宮での忍び逢い

茅渟の宮での忍び逢い 本来、「一夜妻になるべき允恭紀七年十二月の新室の宴の夜から二か月後の允恭紀八年二月に、藤原の宮で共寝の場をようやく得、衣通の郎姫の絶唱(ささがねの蜘蛛の歌)(紀65)、ならびに聖婚と恋の現場を示す小忌衣・恋衣をうたいこむ〈細紋形錦の紐の歌〉(紀66)によって、二人の恋のクライマックスを迎え、「衣通の郎姫」の由来も示唆されていた。

そして、この悲劇的な恋の歌物語はさらに深化され、二人の恋は皇后に遠慮しながら数少ない忍び逢いに追い込まれ、弟姫はさらに「衣通の郎姫」として辛い軌跡を辿ることになる。

藤原の宮での愛の交歓は、又しても皇后の知るところとなり、皇后は「且大きに恨みたまふ」。そこで、「衣通の郎姫の、奏して言さく、「妾、常に王宮に近きて、昼夜相統きて、陛下の威儀を視むと欲ふ。然れども皇后は、妾が姉なり。妾に因りて慙に陛下を恨みたまふ。亦妾が為に苦びたまふ」と、天皇と皇后の苦しい立場に苦慮する。そして、藤原からさらに離れた河内の国の茅渟(現大阪府泉佐野市上之郷)に宮を建てて移住することにした。

こうして、翌九年の二月・八月・十月と間遠ながらその茅渟の宮に行幸があつて、二人は逢っている。

秘める「な告りそ」の恋 しかし、皇后から茅渟への行幸は「百姓の苦」だとの諫めによって(その実態は皇后の嫉妬による)、行幸の数を減らしている。

そして十一年三月に、次のように衣通の郎姫はもう一度絶唱の〈海の浜藻の歌〉(紀68)をうたうことになる。

十一年の春三月の葵卯の朔丙午に、茅渟の宮に幸す。衣通の郎姫、歌して曰はく、

常しへに 君も逢へやも。いさな取り

海の浜藻の 寄る時々を。

いつでも あなたに逢えようか。(いさな取り)

(紀68)

時に天皇、衣通の郎姫に謂りて曰はく、「是の歌、他人にな聆かせそ。皇后、聞きたまはば必ず大きに恨みたまはむ」とのたまふ。故、時の

しかしそれでも弟姫は、姉の皇后の立場に遠慮して、都に近い大和の国の藤原に居を構えることになった。  
妻訪いの自肅 しかしそれでも天皇は、皇后が後の大泊瀬の天皇（雄略天皇）を出産する時に、弟姫に妻訪いしようとしている。そのことを知った皇后は、焼死を覚悟して猛烈な抗議をした。それで、天皇は弟姫への妻訪いを自肅している。

#### 4 藤原の宮での相会

藤原の宮での相会 天皇と衣通の郎姫は、允恭紀八年二月になってようやく次のように逢うことができた。

八年春二月に、藤原に幸す。密に衣通の郎姫の消息を察たまふ。是夕、衣通の郎姫、天皇を恋びたてまつりて独居り。其れ天皇の臨せることを知らずして、歌して曰はく、

我が夫子が 来べき宵なり。ささがねの

蜘蛛の行ひ 今宵著しも。

天皇、是の歌を聆しめして、則ち感てたまふ情有します。而して歌して曰はく、

細紋形 錦の紐を 解き放けて

数多は寝ずに、ただ一夜のみ。

明旦に、天皇、井の傍の桜の華を見して、歌して曰はく、

花妙し 桜の愛で。同愛では

早くは愛です。我が愛づる子ら。

わたしの夫が 訪れそうな夕べである。（ささがねの）

蜘蛛の巣をかける様子が 今宵はつきり見えるよ。

小さな紋様をたくさん織り出している 錦の紐を 解き放って

幾夜も寝ないで、ただ一夜だけの共寝だ。

（花妙し） 桜の愛でるべき見事さ。同じく愛するなら

早くから愛すればよかったのに。わたくしの愛する姫もそうだ。

恋のオーラが恋衣を通った時の絶唱 右の伝承で最も感動的な場面は、「衣通の郎姫、天皇を恋びたてまつりて独居り。其れ天皇の臨せることを知らずして」（ささがねの蜘蛛の歌）（紀65）をうたう箇所であろう。今まで耐え忍んできた激しい恋慕が、ここに至ってこの一首の歌に凝縮されて発露されている。この恋人を待つしかなかった衣通の郎女の哀切極まりない恋歌は、正に絶唱といふべきものである。このように恋情に耐えきれずに絶唱を口にした瞬間にこそ、恋のオーラが色鮮やかな恋衣を通して光り輝いたというのが、この歌物語（歌劇）の本来の姿だった、と考えられる。

そしてその「衣通の郎女」の真骨頂を、初来訪した天皇が物陰から見聞し、彼女が真の「衣通の郎女」であることに魅了されている。

古今集の「ささがねの蜘蛛の歌」そして、この允恭紀の恋のクライマックスはよほど傑作として知られて流布されていたらしく、『古今集』に採用された「ささがねの蜘蛛の歌」（古今1110・墨滅歌）はその条の異伝であった。

恋衣Ⅱ「錦の紐」を解く聖婚 そこで天皇は、「細紋形錦の紐の歌」（紀66）と「花妙し桜の歌」（紀67）をうたって衣通の郎姫の恋情に応える。



いるばかりで、激しく恋する時に恋のオーラが恋衣を通して輝く女性の名称になっていない。

「衣通の郎姫」と「弟姫」の使い分け しかし、この弟姫の天性の美貌ぶりを紹介した後の、恋の展開を辿ってみると、(1)天皇と弟姫の恋の場面で「衣通の郎姫」が用いられ、(2)それ以外の場では「弟姫」だけが用いられている。

(1)の事例は次のとおりである。まず、右の「衣通の郎姫」の名称由来を聞いて恋心を抱いた直後の天皇は、「志、衣通の郎姫に存け(心をかけ)」たとある。また、八年二月に大和の国の藤原(現明日香村小原)で天皇と弟姫がはじめて逢い、絶唱の〈ささがねの蜘蛛の歌〉(紀65)をうたう場では、弟姫が「衣通の郎姫」で統一されている。そして「昼夜相續ぎて、陛下の威儀を視むと欲ふ」と天皇に愛を告げる時も、「衣通の郎姫」の発言になっている。そしてまた、天皇は大和の国の藤原から河内の国の茅渟の宮に「衣通の郎姫」を「居らしめ」、十一年三月に天皇と姫が逢つて姫が絶唱の〈海の浜藻の歌〉(紀68)をうたった時にも「衣通の郎姫」がうたった、と記している。そして最後に、天皇が愛する弟姫の名を後世に残すために「藤原部」という御名代を定めた時も、「衣通の郎姫の為」と記している。

この(1)に対して(2)では、天皇が「弟姫」を召したばかりの時は、「弟姫」は姉の「皇后の情を畏」んでいる。また、舍人の中臣の烏賊津の使主に「弟姫」を宮中に連れて来るようにと下した勅も、「弟姫」と事務的に扱い、使主が彼女を宮中に連れ出そうと姫の居を構える家の庭先で強訴しながら四苦八苦する場面でも、「弟姫」だけで通している。

恋の場と恋以外の場 考えてみると、公的な祭祀儀礼での恋だろうが、私的な場での恋だろうが、宵から明け方までの恋の現場では一人でいても二人でいても、男女のいずれもが恋の晴衣・恋衣を着用している。

とすると、恋情に溢れている場では恋人の身体から恋のオーラが晴衣・恋衣を通して光り輝くという発想が生まれ、「衣通の郎姫」が生まれることになる。

そしてこの恋の場以外の日常の営み、例えば読書中、食事中、トイレ中、あるいは無理やり宮中に連れ出されるなどの場では、恋衣を着ておらず、恋情も湧きにくいので、そういう場では恋情を伴わない実名だけが登場する仕儀になるだろう。

恋のオーラを放つ「衣通の郎姫」 こうしてみると、允恭紀の本文における恋の場面にだけ用いられる「衣通の郎姫」の用例は、人物紹介で「衣通の郎姫」を解説した主旨(生来備えていた肉体的な美質がいつでも着衣を通して輝く美女・麗し女)と齟齬しており、「衣通の郎姫」は基本的に夜の恋する時にだけ恋のオーラが身体から発して恋衣を通して輝く女性の義である可能性が高いことになる。

### 3 お召しに苦慮する弟姫

烏賊津の使主の庭前での強訴 允恭紀七年十二月の条で、天皇は「衣通の郎姫」の名称の由来(美貌ぶり・麗し女ぶり)を聞いて「志、衣通の郎姫に存け」ている。そして近江の国の坂田にいる弟姫を七度召したけれども、弟姫は実の姉の「皇后の情に畏みて」参向しなかった。

そこで天皇は、舍人の中臣の烏賊津の使主を愛の使者(仲人)として遣わす。この時、烏賊津の使主は姫の家の庭先に仰々しく畏まって、姫を宮廷に連れ出そうとした。この強訴に根負けした弟姫は、宮廷へ同行することに同意する。



(左注は省略)

〔三輪山(綜麻条) への惜別の長・反歌〕(万17・18) は、額田の王が中大兄(天智天皇)のために代作したもので、実際の儀礼では中大兄(天智天皇)が大和の国の国魂である大物主の命の鎮座する三輪山にむかって別れを告げたものである。

これに対して、長・反歌に「和する歌」の〔綜麻条の棹の歌〕(万19) は、三輪山の最高神女の井戸の王が天智天皇の英姿を賛美し、天智朝・近江朝の繁栄を予祝するものであった。

地元の優良な小忌衣・恋衣 さて前述したように、この〔綜麻条の棹の歌〕(万19) は、棹摺りの恋衣を着る恋愛習俗を下地にした三輪地方の定番の恋の古歌・謡い物であった。

棹を詠む万葉歌は十四首あり、そのうちの家持作の〔霍公鳥を怨恨むる歌〕(万4207)を除いて、どの歌も「地名+特産品の棹」の形式を踏んでいる。それは基本的には、その地方の棹が優良な特産品であることを称賛している。そして、その地元産の棹摺り(染め)の始原は、小忌衣・斎服(『延喜式』には「棹措」とある)であり、それは恋衣にもなっている。

地元の優良な恋衣による恋人賛美 そして、その恋衣の延長線上にその恋衣を着る恋人を置き、〔綜麻条の棹の歌〕(万19) の場合は、その綜麻条の棹摺りを着る恋人が三輪山の棹摺りに因んでその恋情が棹の恋衣を通して最高に色美しく輝く殿方だ、と賛美することになる。

三輪地方の古歌の本義 この三輪地方の古歌である〔綜麻条の棹の歌〕(万19) の本意は、結句の「目に付く我が背」にあり、ここでは恋する男・夫を女人・妻が褒め称えている。この結句を「如す」という比喻によって導くのが上四句で、この上四句は神の山である「綜麻条」＝三輪山の埼・端の野棹(野生の棹)がこの地方の晴衣・小忌衣・恋衣として最高級の特別な染料・摺り料だったことを述べている。この殊にすぐれた小忌衣・恋衣が人びとの目を引く出来栄えになるので、それがこの恋衣を着る恋人・夫の恋する英姿・麗姿への称賛へと転化されることになる。

「棹の衣に付く如す我が背・妹」そしてこの愛すべき背を賛美する「棹の衣に付く如す目に付く我が背」は、男から同じ棹摺りの恋衣を着る女人にもむけられ、「棹の衣に付く如す目に付く我が妹」と言い換えられてもいたろう。

こうして「棹の衣に付く如す目に付く我が妹・背」は、黒色(茶色)を呈する色美しい棹摺り(棹染め)の恋衣を重ねながら共寝することになる。

以上のように、神の妻訪いに倣って上四句で三輪地方の上等な染料の棹を妻訪いの現場に着て行く恋衣に付ける＝「衣に付く」ことを述べ、この四句が結句の恋のオーラを放散して輝く「目に付く我が夫(妹も含める)」を導いている。

類型的な恋人賛美 してみると、この小忌衣を基盤にした摺り衣・恋衣の「目に付く」は、見事に摺り染めにして恋情を美しく輝かせるといふ点で、「丹穂ふ」や「丹付らふ」と同義である。こうしてみると、この恋衣を踏まえた恋人賛美の「目に付く我が背(妹)」は、「紫の丹穂へる妹(背も含める)」(万21)、「垣津幡丹付らふ妹・君」(万1986・万2521)と同一線上にあることになる。

衣通姫・彦へ そしてさらには、この恋衣の「棹の衣に付く如す目に付く我が背・妹」は、極北の恋に身を焦がしてその恋のオーラが恋衣を通す

## 2 〈綜麻条の榛の歌〉から

古歌の〈綜麻条の榛の歌〉の恋人賛美 蒲生野での〈葉狩りの紫の贈答歌〉(万20・21)において、紫の恋衣を着る恋愛習俗から恋する額田の王を「紫の丹穂へる妹」と賛美する恋詞が生み出されたように、三輪地方の古歌・謡い物としての〈綜麻条の榛の歌〉(万19)においても、榛摺りの恋衣を着る恋愛習俗から恋する男・夫を「さ野榛の衣に付く如す目に付く我が背」と賛美する恋詞が生み出されている。

古歌の〈綜麻条の榛の歌〉を転用した近江遷都歌 そしてこの古歌が、そのまま近江遷都の折に催した三輪山への惜別の儀礼において転用され、

三輪山 大物主の命を奉斎する三輪氏側が、近江に遷都しようとする天智天皇を「さ野榛の衣に付く如す目に付く我が背」だとその雄姿を賛美し、

近江朝の天智天皇の繁栄を予祝している。

近江遷都歌の本文 その近江遷都歌の本文は、次のとおりである。

額田の王、近江の国に下る時、作れる歌、井戸の王の即ち和する歌  
(味酒) 三輪の山よ。

(あをによし) 奈良の山の、

山の端に 隠れるまで、

道の曲り目が 幾つも重なるまで、

十分に 見続けて行きたいのに、

幾たびも 眺めたい山だのに、

つれなくも 雲が 隠してよいものか。

反歌

三輪山を そんなにも隠すことか。せめて雲だけでも

思いやりがあつてほしい。隠してよいものか。

右の二首の歌は、山上の憶良大夫の類聚歌林に、

「近江の国に都を遷した時、

三輪山を御覧になつて天智天皇が詠まれたお歌である」とある。

「日本書紀」には、「天智天皇の六年三月

十九日、近江に都を遷した」とある。

綜麻条(三輪山)の 林の端の さ野榛が

鮮やかに衣に摺り付くように、よく目に付く我が愛しい人よ。

日本書紀に曰く、「六年丙寅の春三月、  
辛酉の朔の己卯、都を近江に遷す」といふ。  
綜麻条の 林の前の さ野榛の  
衣に付く如す、目に付く我が背。

(万17)

(18)

(19)

「紫の丹穂へる妹」 このように額田の〈茜指す紫野行きの歌〉(万20)によって、日中の狩りに恋を持ち込んだと設定された大海人は、〈紫の丹穂へる妹の歌〉(万21)で紫野・標野(宮廷の女以外の立ち入りを禁じる野)で薬草の紫草などを採取する額田が、自分の告白した恋に見事に応えていた、と〈紫の丹穂へる妹の歌〉で囁くことをした。すなわち、額田の着る薬狩りの小忌衣の紫衣を恋する者の着る「恋衣」に見立て、その恋衣から彼女の恋情が「丹穂へる」(色鮮やかに映発する)「紫」色として輝き出ていると見なし、これをさらに一ひねりしてその額田は激しい恋情を放つ「紫の丹穂へる妹」Ⅱすっかり恋に落ちて紫の恋のオーラを放っている女性だ、と誉めちぎっている。

こうして大海人と額田によって設定された恋の様態は、恋の時間帯でない日中の大胆なやり取りであり、その過激さ・破天荒ぶりは二人の贈答歌の激烈さと相呼応している。

小忌衣から恋衣へ 以上この男組と女組のトップは、薬狩りの昼夜における小忌衣と恋衣の性格をもつ紫衣に焦点を当てながら、薬狩りと饗宴における紫の衣の両面を巧みに歌い上げ、天智朝の一大イベントを最高潮に盛り上げている。

そしてこのような恋の贈答歌を交わした後、恋する二人は紫の恋衣を重ねて共寝するという仕儀になる(あるいは、そのようになると幻想されている)。

「紫の丹穂へる夫・君」とすると、恋する女性である額田の「紫の丹穂へる妹」に対するお似合いの恋する殿方の大海人は、「紫の丹穂へる夫・君」だということになる。

「垣津幡丹付らふ妹・君」 現にこの「紫の丹穂へる妹・夫」の対の存在を想定させる用例がある。それは、恋衣の紫染めの原始形である「垣津幡」摺りを恋衣にした次の類型的な二首の恋歌に、「垣津幡丹付らふ妹・君」が見られるからである。

我のみや かく恋すらむ。垣津幡

丹付らふ妹は いかにかあるらむ。

垣津幡 丹付らふ君を、ゆくりなく

思ひ出でつつ 嘆きつるかも。

わたしだけ こうも恋するのだろうか。垣津幡摺りの  
衣を通して恋のオーラを放っているあの娘は どうなんだろう。

(万1986)

垣津幡摺りの 衣を通して恋のオーラを放っているあなたを、ふと  
思い出しては 嘆いたことだ。

(万2521)

「垣津幡」摺りは垣津幡の花で摺り上げた恋衣で、紫色を呈している。「丹付らふ」は「丹穂ふ」と同義である。したがって、この二首にある「垣津幡丹付らふ妹・君」は、いずれも麗しい恋に落ちている「紫の丹穂へる妹・夫」と同じことになる。

衣通姫・彦へ こうしてみると、紫の恋衣を重ねながら共寝する「紫の丹穂へる妹・夫」や「垣津幡丹付らふ妹・君」は、色艶やかな紫の恋衣を通して恋のオーラを発散させながら恋に夢中になっている男女ということになり、それは激しい恋に落ちている「衣通姫・彦」と連接している、といえるだろう。



## 二 恋衣を着る女人から衣通姫へ

## 1 葉狩りの〈紫の贈答歌〉から

恋に落ちる恋人の類句 恋人たちが恋衣を着て相逢うという恋愛習俗は、各種の恋情表現を生み出している。そのなかに、恋情が色艶やかな恋衣を通して放散し、それによって麗しい恋に落ちている男女を表現する類句がある。

そしてそのような類句が下地になって、「衣通姫」・「衣通の王」・「衣通の大郎女」などという「衣通」を中核にした特有な名称が生まれ、そしてそれに見合った特有な人物造型がなされたらしいことを述べてみる。

その典型例として、紫染めと榛染め（摺り）を恋衣にしている『万葉集』巻一の代表的な歌を取り上げてみる。

蒲生野の葉狩りの贈答歌 紫の恋衣の歌の代表例は、万葉歌のなかで最も知られている額田の王の〈茜指す紫野行きの歌〉（万20）と大海人の皇子の〈紫の丹穂へる妹の歌〉（万21）の贈答歌である。

天皇（天智天皇）、蒲生野に遊獵する時に、額田の王の作る歌

茜指す 紫野行き 標野行き、  
（茜指す） 紫野を行き 標野を行って、

野守は見ずや。君が袖振る。  
野守は見えないというのか。あなたが袖を振るのを。  
（万20）

皇太子（大海人の皇子）の答ふる御歌

紫の 丹穂へる妹を。憎くあらば、  
紫の衣を通して 恋のオーラを放っているあなたよ。あなたが好きでなかったら、  
人妻ゆゑに 我恋ひめやも。  
人妻と知りながら わたしはどうしてあなたに心魅かれたりしようか。  
（万21）

近江朝（天智朝）が挙げて五月五日に近江の国の蒲生野で催した葉狩り（遊獵）では、祭祀の恒例として参加者の全員が紫染めの小忌衣・斎服を着用していた。そして、日中は男組と女組に分かれて鳥獸狩りと葉草狩り（葉草などの採取）に勤しみ、夜は男組と女組が饗宴を共催し、それぞれの薬を調理して食べたり、交換したりして、恋を語らい合っていたようである。

右の贈答歌は、その折りに女組の長（額田の王）と男組の長（大海人の皇子）が、それぞれの組を代表して饗宴の場を盛り上げた宴席歌である。「袖振る」は恋衣の袖を振る となると、この男女が交流する夜の宴席での贈答歌は、その場の性格に照らしてみると、どのように解すべきだろうか。

額田の王が日中に葉草狩りをしている禁園（標野）の紫野で囁目したという大海人の皇子の「袖」は狩衣で、その本来の姿は祭祀としての遊獵で着るべき紫染めの小忌衣であった。しかし皇子が禁忌を破って、男組の狩獵の場から離れて女組の葉草狩りの場に現れ、額田にむかつて愛情表現としての「袖振る」行為をすると、その紫の狩衣・小忌衣は忽ち「恋衣」に変容することになる。

君が行き 日長くなりぬ。山尋ね  
迎へか行かむ。待ちにか待たむ。

あなたの旅は 久しい日数になった。山を踏みわけて  
迎えに行こうか。それともこのまま待ち続けようか。

(万85)

そして、その恋慕の激しさは、次にうたった〈高山で死なましものをの歌〉(万86)において仁徳天皇を「恋ひつつあらず」に「死なましものを」と自死にまで言及し、この歌の背後に軽の大郎女Ⅱ衣通の王の情死があることをうかがわせている。

こうして見ると、『万葉集』巻二の磐の姫は允恭記の「衣通の王」・「衣通姫」を祖型にした「万葉版の衣通姫」だ、といえそうである。

**磐の姫歌群の左注** ところが、『万葉集』巻二が、この磐の姫皇后歌群四首に左注を記し、允恭記の軽の大郎女Ⅱ衣通の王の〈山たつの迎への歌〉(記87・万90)を挙げ、次いで仁徳紀の磐之媛嫉妬物語の条、ならびに允恭紀の軽の皇子と軽の太娘の同母兄妹の相姦の条を挙げている。そして『万

葉集』の編者は、この磐の姫皇后歌群四首の連作(とくに万85)とそれ以前の伝承との関わりに困惑して、この四首(とくに万85)と「二時二代」(仁徳朝と允恭朝)の磐の姫皇后の伝承、ならびに同母兄妹の相姦事件との関わりがわからない、と述べている。

**万葉版の衣通姫** しかしここは、磐の姫皇后歌群の作者・磐の姫皇后が、歌劇の様相を呈している允恭記の軽の大郎女Ⅱ「衣通の王」の伝承を踏まえ、かつ左注が見落としている仁徳記の天皇と石之日売皇后の復縁譚をも踏まえながら形成された「万葉版の衣通姫の流」だ、と考えるべきだろう。

そして後者の仁徳記の天皇と皇后の復縁譚でうたわれる天皇と皇后の恋歌六首も、「志都歌」Ⅱ「静歌」という歌唱法でうたわれているので、この仁徳天皇と石之日売皇后の復縁譚も允恭記と同様に歌劇の様相を呈していた、というべきである。

**万葉版の衣通姫の謡い物・歌劇** こうしてみると、このもう一つの「衣通姫の流」と想定される『万葉集』巻二の磐の姫の連作も、歌曲を伴っていた祖型の允恭記と仁徳記のあり方を継承して、管弦(笛や琴)を伴った謡い物・歌劇だった可能性が高い。そしてこの歌群も、前述した平安初期の『孫姫式』(『和歌式』とも)のいう「衣通比咩の歌」のあり方へと流れ込むのかもしれない。

#### 4 本論のねらい

**本論のねらい** 以上、まず「衣通姫」の名称とその人物造型の背後には、「小忌衣」を着る聖婚の習俗を背景にして、色美しい「恋衣」を着て恋する男女が相逢うという恋愛習俗があることを述べてみたい。そして、この恋衣から発想された究極の愛に生きる悲恋の女人Ⅱ「衣通姫」に、忍耐型の姫と奔放型の姫の二つの「流」(系譜)があることを述べてみたい。

この「衣通の王」の絶唱〈山たづの迎への歌〉(記87)は何ものにも遠慮しない過激さ・強靱さをもっている。

そしてその奔放さは、二人の仲を引き裂く天皇の命令を、連れだつて共に死ぬという情死の形で否定して、愛の勝利を獲得している。

**恋衣からの発想** 允恭記はその冒頭部の皇統譜で、「軽の大郎女」が「衣通の郎女」とも「衣通の王」ともいわれる由来を、次のように総括的に伝えている。

軽の大郎女、亦の名は衣通の郎女(御名を衣通の王と負はせる所以は、その身の光、衣より通し出づればなり)

一見するとこの条も、允恭紀の姉妹の生来の身体的な美質Ⅱ「容貌絶妙れて比無し。其の艶しき色」が日常的に四六時中「衣より徹りて見れることと同様であるように解釈できそうである。しかし、軽の大郎女の「身の光」が肉体的な美質から発しているとは明記されていない。

そしてそれどころか、軽の大郎女と軽の太子の恋が展開する場面の中で、恋する二人が引き裂かれる時に大郎女がはじめて激しい恋情を吐露して絶唱の〈あひねの浜の蠣貝の歌〉(記86)と〈山たづの迎への歌〉(記87)をうたった時に、唐突に「衣通の王」がうたった、と言い換えられている。

してみると「軽の大郎女」は、この太子を恋慕する絶唱をうたう恋のクライマックスで「衣通の王」となつて、「その身の光、衣より通り出づることになる。となるとその身から発する光は、恋のオーラと考えるしかないだろう。すなわち、軽の大郎女の発した恋のオーラが、恋の時間帯(夜)に彼女の着る「衣」Ⅱ色艶やかな恋衣を通して光り輝いていることになる。この恋のクライマックスにおいてこそ、軽の大郎女は正に悲恋の権化としての「衣通姫」になっている。

**行動的な激しい恋をする女性** 「小野小町説話の基層」「塚本澄子」が説くように、軽の大郎女Ⅱ衣通姫には、「禁忌を犯す恋に命をかけ行動する激しい女性であり、(中略)よき女のなやめるところある病婦のイメージとはほどとおい」ものがある。ここには、前述した允恭紀の「弟姫」やその系譜に連なる「小町」などの「衣通姫」とは異質のタイプの「衣通姫」が造型されている。

**軽の大郎女Ⅱ衣通姫の歌劇** このもう一人の軽の大郎女Ⅱ衣通姫の恋の展開を綴る允恭記は、兄の軽の太子と衣通姫がうたう歌に、「夷振の上歌」・「宮人振」・「天田振」・「読歌」などの節名を付している。してみるとこの悲恋の歌物語も、「管弦」(笛や琴)を伴った謡い物あるいは歌劇であり、「孫姫式」(「和歌式」とも)のいう「衣通比咩の歌」が管弦を伴って平安初期までうたわれていたことにつながるのかもしれない。

**もう一つの「衣通姫の流」** この允恭記の「衣通の王」を祖型にした「衣通姫の流」と思われる悲恋の姫が、『万葉集』卷二の磐の姫皇后歌群(万85~88)の作者・磐の姫のようである。この歌群そのものには磐の姫が「衣通姫の流」であるかのような記述はないけれども、この磐の姫皇后が仁徳天皇を激しく恋慕する歌群の冒頭歌〈山尋ね迎への歌〉(万85)は、次のように允恭記の軽の大郎女Ⅱ衣通の王がうたった〈山たづの歌〉(記87)と酷似し、大郎女がとつたような愛の行動への強い衝動を直情的に訴えている。

いとせめて 恋しき時は、むばたまの  
夜の衣を 反してぞ着る。

とても身に迫るほど 恋しい時は、あの人を夢に見たいと願って (むばたまの)  
夜の衣を 裏返して着る。

(古今554)

したがって、この恋衣の恋愛習俗を基盤にして、小町が悲恋の「衣通姫」になりえる状況にあった。すなわち、更衣の立場にあった小町は、当代の仁明天皇（在位は八三三～八五〇）の愛妃として皇后以下の高位の後たちに圧迫されながら耐え忍んでいるという点で、允恭天皇の皇后（忍坂の大中つ姫で、弟姫の姉）に圧迫される弟姫像と重なるものがある。こうして、小町の恋歌には恋衣の面影を残しながら、仁明天皇との悲恋がうたい上げられている。

貫之が小町を「衣通姫の流」と言ったのは、小町の恋歌の基盤に「夜の衣」＝恋衣の発想を据えながら恋のオーラを放たずにはいられない、天皇をめぐる後宮の悲恋がある、と知っていたからであろう。

管弦を伴った謡い物・歌劇「歌学の源流」「小沢正夫」によると、歌論書の『孫姫式』（『和歌式』とも）は九〇〇年代の中頃に成立し、その書名の「孫姫」は八〇〇年代の中頃に活躍した小野の小町に比定されているという。その『孫姫式』に次の一文がある。

衣通比咩乃歌被管弦而猶存。

すなわち衣通姫の歌には管弦（笛や琴）を伴っており、謡い物あるいは歌劇として今（九〇〇年代の中頃）にもなお伝承されている、と述べている。とすると、允恭紀の衣通の郎姫と允恭天皇の恋の歌も、その「衣通姫の流」（後裔）である小町の仁明天皇との恋の歌も、歌劇仕立てになって謡い物になっていたのではなかろうか。

### 3 二つめの「衣通姫の流」

もう一人の「衣通姫」 古代文学には、もう一人の「衣通姫」がいる。それは、『古事記』の允恭天皇の条に允恭記において同母兄の「輕の太子」と禁じられた近親相姦の恋をした「輕の大郎女」で、「衣通の王」とも称されている。

その代表的な恋歌は、輕の大郎女に「衣通の王」が次のように「伊余の湯」（愛媛県松山市の道後温泉）に流された恋人の兄（輕の太子）を追いかけるというもので、愛の行動をともなった過激な歌である。

君が行き 日長くなりぬ。山たづの  
迎へを行かむ。待つには待たじ。

あなたの旅は 久しい日数になった。（やまたづの）  
迎えに行こう。このまま待つてはいられない。

「此に山たづと云へるは、是れ今の造木なり。」

(記87)

絶世の美女からの発想 允恭紀は允恭天皇と弟姫の恋物語がはじまるきっかけとして、弟姫が「衣通の郎姫」Ⅱ「衣通姫」だといわれる由来を、次のように記している。

弟姫、容貌絶妙れて比無し。其の艶しき色、衣より徹りて見れり。是を以て、時の人、号けて、衣通の郎姫と曰す。

「衣通の郎姫」Ⅱ「衣通姫」の名の由来は、絶世の美人である弟姫の肉体的な美質（艶しき色）が「衣より徹りて見れ」ることにある、と説明している。

恋衣からの発想 しかしこれは、允恭紀のいう「時の人」の合理解のようである。「三 忍耐型の弟姫」で後述するように、允恭天皇と弟姫の伝承では允恭天皇と弟姫の恋の展開を語る場面だけで「衣通の郎姫」が用いられ、恋と直接関係しない場面では本名の「弟姫」だけが用いられている。こうしてみると、弟姫の耐え忍びがたい媚々たる恋情・恋のオーラが色艶やかな恋衣を通して放たれる恋の場面、すなわち弟姫が悲恋の極北を生きている時に、「衣通の郎姫」Ⅱ「衣通姫」の名を獲得している、と考えられる。

細紋形錦の紐Ⅱ恋衣 現に允恭天皇がようやく愛しい弟姫と初夜を迎えた時に嬉しさのあまりうたった次の恋歌（細紋形錦の紐の歌）（紀66）を見ると、恋の現場に恋する主人公が恋衣（今の場合、「細紋形錦の紐」）を身に付けて登場しており、激しく恋慕する女人を「衣通の郎姫」と命名した由来の背景が端なくも露呈している。

細紋形 錦の紐を 解き放つて  
あまた 幾夜も寝ずに、ただ一夜のみ。

小さな紋様をたくさん織り出している 錦の紐を 解き放つて  
幾夜も寝ないで、ただ一夜だけの共寝だ。

（紀66）

この「衣通の郎姫」は、その若さ・美しさ故に允恭天皇から愛されながらも、姉の皇后に遠慮して孤愁の人生を送り、「細紋形錦の紐」を飾り付けた恋衣から恋のオーラを放散させなければならない哀れな女性であった。

衣通姫の存在する時間帯 そもそも恋の時間は、宵から明け方までであった。「我が夫子が来べき宵」を予兆したのは、「蜘蛛の行ひ今宵著しも」であり、その宵の予兆どおりに「我が夫子」Ⅱ允恭天皇は愛しい弟姫との初夜を迎え、天皇は恋衣の「細紋形錦の紐」を解き放つて数多は寝ずにただ一夜のみ共寝をしている。

こうしてみると、恋衣から恋のオーラを放散させる「衣通姫」が存在するのは、基本的に恋衣を着る夜の時間帯に限られることになろう。  
小町の恋衣と悲恋の歌 『古今集』で「衣通姫の流」と言われた小町の歌にも、次のように「夜の衣」Ⅱ恋衣を反して着て、なかなか逢えない恋人の仁明天皇と夢で逢うという〈夜の衣を反す歌〉（古今554）がある。



(万21)・「垣津幡丹付らふ妹・君」(万1986・2521)・「さ野榛の衣に付く如す目に付く我が背」(万19) などがある。  
 「衣通姫」の誕生 そしてこの恋衣による恋人賛美がさらにセレクトされ、君・背を激しく恋慕して恋のオーラをこの恋衣を通して輝かす悲恋の姫君が造形され、そのヒロインを「衣通姫」(そとほしひめ)とも「そとほしひめ」とも訓む」と称するまでになった、と考えられる。

## 2 一つめの「衣通姫の流」

古今集序の「衣通姫の流」 さて、『古今集』(九〇五年成立)の仮名序に、「近き世にその名聞こえたる人」(いわゆる六歌仙)の評として、小野の小町が「古の衣通姫の流」に位置付けられている。その仮名序と真名序の小町評は、次のとおりである。

小野の小町は、古の衣通姫の流なり。あはれなるやうにて、強からず。いはば、よき女の悩めるところあるに似たり。強からぬは、女の歌なればなるべし。

小野の小町が歌は、古の衣通姫の流なり。然れども、艶にして氣力無し。病める婦の花粉を著けたるが如し。(書き下し)

古の衣通姫 その「古の衣通姫」は、『古今集』によると次の墨滅歌(ささがにの蜘蛛の歌)(古今1110)をうたっている。

衣通姫の一人居て帝を恋ひたてまつりて

我が夫子が 来べき宵なり。ささがにの

蜘蛛の振舞ひ 予て著しも。

わたしの夫が 訪れそうな夕べである。(ささがにの)  
 蜘蛛の巣をかける様子が 前もって今宵はつきり見える。

(古今1110)

「そとほしひめ」と「そとほしひめ」 なお、以上のように中古に成立した『古今集』は「衣通姫」を「そとほしひめ」と訓んでいるけれども、本論では上代文学における「衣通姫」を「そとほしひめ」と訓むことにする。ただしどちらの訓みにしても、意味するところは同じである。

允恭紀の弟姫Ⅱ衣通の郎姫 この右に引用した『古今集』のいう「衣通姫」とは、『日本書紀』の允恭天皇の条Ⅱ允恭紀に伝える「弟姫」のこと  
 で、この条では「弟姫」のことを「衣通の郎姫」とも称している。すなわち、弟姫が允恭天皇と相思相愛の仲ながら、弟姫の姉の皇后・忍坂の大  
 中つ姫に遠慮しながら耐え忍ぶ恋をし、古今歌とは同じ状況(衣通姫の一人居て帝を恋ひたてまつりて)でほぼ同じ次の恋歌(ささがねの蜘蛛  
 の歌)(紀65)をうたっていることから、『古今集』のいう「衣通姫」とは允恭紀の「弟姫」だとわかる。

我が夫子が 来べき宵なり。ささがねの

蜘蛛の行ひ 今宵著しも。

わたしの夫が 訪れそうな夕べである。(ささがねの)  
 蜘蛛の巣をかける様子が 今宵はつきり見えるよ。

(紀65)

## 恋のオーラを放つ悲恋の姫たち ― 二つの「衣通姫の流」―

畠 山 篤

## 一 はじめに

## 1 恋衣から発想された恋人賛美

**恋衣を着る恋愛習俗** 古代においては、恋する男女が相会うときに、色美しい晴衣すなわち「恋衣」を身に纏う習俗があった。

「恋衣」の用例は、万葉歌に唯一、次の恋歌に見出される。

恋衣こひころも 著奈良きならの山に 鳴く鳥とりの、  
間なく時ときなし。我が恋こひふらくは。

恋衣こひころもを 着馴きならす―奈良ならの山に 鳴く鳥とりのように、  
絶え間たまもない。わたしの恋こひは。

(十二―3088)

この〈恋衣こひころも著奈良きならの山の鳥の歌〉は、「著馴きなら」がこれと同音の「奈良なら」を導く修辭になり、その「奈良ならの山に鳴く鳥の」ように恋人を想う気持ちが頻りだ、と述べている。すなわち、色美しい恋衣を着馴きならしてしまうほど頻繁に恋人に逢って馴染んでも、マンネリ化しないどころか、いよいよ魅力を感じて頻りに想っている、という意である。

この「恋衣こひころも」とは恋の場で常に見られる色美しい特別な日の晴衣はれころもの総合的な別称で、恋人が恋の場で着る用途に注目した洒落しゃれた名称である。この恋歌は一見すると複雑な修辭を用いているように見えるけれども、当時恋する誰もが従った恋衣を着る習俗を踏まえた類型的な恋歌で、とてもわかりやすいものであった。

**小忌衣こみころもを着る神婚** この恋する男女が恋衣こひころもを着る恋愛習俗は、小忌衣こみころも・斎服さいふくを着た男神が同じく小忌衣こみころも・斎服さいふくを着た神女を妻訪つまどう信仰を背後にもっていた。

**恋衣から発想された歌群** そして、この恋衣を着て恋人同志が相逢うという恋愛習俗を基盤にして、各種の恋情表現が獲得されている。筆者はその典型例として、万葉歌における「紫むらさき」の歌十七首のすべてと、「榛はり」の歌十四首のうち十三首に、これらの染料（紫草の根、榛の実・樹皮）で染めた（摺った）恋衣（具体的には紫染め、黒・茶染め）の発想が横たわっていることを論じた。その成果は、拙著『万葉の紫と榛の発想―恋衣の系譜―』として上梓している。

**恋衣による恋人賛美** そして、この恋衣の恋愛習俗から発想された恋歌には、色美しい恋衣を踏まえた恋人賛美の句として、「紫むらさきの丹穂にほへる妹いも」